823
.M8N2

泯江八達

三樹

31

Freer Gallery of Art
Washington D. C.

真木柱

卅七歳　　大政大臣

十月比右大将依弁君媒以見希西対姫君了

三日夜御消息為源氏君御返事書之

十一月内侍所女房参内侍上方了

大将北方時源氏君後内侍上御許物語之

内侍上可参入内間事

大将北方煩物気了　式部卿宮御娘真木柱姫君母儀也

又宮欲奉移大将本宮北方我事了

大将与北方物語絶了

大将欲出尚侍許之時北方懸火取事

翌朝大将送文於尚侍許陳先夜不参子細了

木工君与大将贈答了

大将参尚侍許事

大将還故郷見女君逢事

式部卿宮奉渡大将北方了

姫君出宮詠真木柱了

同冬北方悲源氏事
大納言并ニ冬服中納言事
大将伴男君十才八才還故里事
廿八歳　同
正月尚侍参内事　承香殿東西為曹司
男踏歌事
大納言仮職曹司之時并源氏歌所称自大将之由奉尚侍曹司事
其夜主上渡御尚侍曹司事
尚侍退出事
主上有御消息尚侍返事給事
二月六条院送消息於尚侍事　自返事
源氏君弾東琴歌風俗給事
三月渡西対見山吹花事
鴨子送尚侍許事
大納言書状之事
十一月尚侍生男子事

柏木ハ中将常参尚侍許事
近江君振舞事
沖つ舟のよるへなみちにたゝよはゝさほさしよらむとまりをしへよ
老のまかりまかるまゝに

真木柱　式部卿
　向巻名
今はとて宿かれぬともなれきつる真木の柱はわれをわするな　以歌為巻名歟
　也
柱の割目にも書て此真木柱を見て筋をもわり紙に書て付る巻名なり
源氏廿七歳ノ十月ヨリ明年廿八才ノ秋マテノ事ヲ此巻ニ記セリ
又竪の並し
　哥
源氏廿八才の冬より明年迄也　但十一月此初見えたり
此巻の始ニも梅里の事なともかれてあり

松 源氏七才十月より弐八の終まで有るを但末十月にいておはし
きちこそとさへしるさおほかてかれは十月と有なりとみえん
安 たゞはまだの頃を一年ならへとあれとも奏名は未紀なし
私曰奏の事にいはゆる安楽(?)に付奏は源氏卅八家の十月
と有なりとかいてあるに男子誕生有りて十月しるして来る秋の
夕霧と有は[illegible]のるすといへんとておほよそしるすとなり
おもく思ひ侘しきれはうたゝかの折よりのをさんとかく来るに秋の
夕暮と有をみしる[illegible]おもろは色きそるもさ今[illegible]なし
成さしく[illegible]月小男子生れしたりとて来りさもとて来るに
もくり出たる秋の夕をと見てはいへんやむ十月との[illegible]なし
[illegible]奥に得也

松 源氏の[illegible]れんし
うらふきこしめさんてもうしこうし
花 是よりは鈴虫の[illegible]を弁れおのこは[illegible]してもろ[illegible]君子は
よかしそやうる事し[illegible]待るにかくいはて[illegible]なきに[illegible]
[illegible]すれあれは門にきこしめしく[illegible]そしてあくへしはしきゝ
くへにのうさししおもとをいしめくれ[illegible]人とはいさめやかしまふ
とし源氏君は色内大臣も知のかれすなれはあつけにいろ九月
とは物語子さるしこめ見弁れおもしおそては知ましきゝすなる
しうやれうきさせ物語のめ[illegible]しはとみへきゝし
弄 もろ[illegible]大将に色[illegible]とぞりもろゝするしく見えたり 八月
志りしるに 世男(?)は度くもしせしこし公私のかゝ[illegible]なるとも
いさめへと 源の[illegible]るし
さしもえつると 鈴虫の[illegible]しのしとはさきしもし
おくうれといさゝかうらさけ 大将のんしもろゝ九月も大将れ
[illegible]のあうれおもき すしとやくしてうらもさけ終はさるし
[illegible]もろゝの[illegible]し
いうしうつしと
松 鈴虫のゝしもろゝれうらさけめくを[illegible]し

思ふまゝにはめくみて　秘　人々のかしこさへと月をも共に眺めり
よそにそれくいとうつゝあらし
いし山のおもかけをも　は　石山寺在近江国志賀郡南一説聖武天
皇勅願金鷲仙人建立と　勅付良弁僧正奉拝らう大物結座作りとる逢
きまうるのほとりにすまひとらうしうつしまつるは御まいりとていとうきまきたまひなん
を　石山の観世音と佛といふ菩薩を仏といふもまいりつゝの奏てき
ゆるしおはしぬる舞足ありの観音にまふて事と御まつりたまひし
女君のうちゝりのしと　女　まいり参らし給はまくもなく給はぬあきなきまに
を　まいられ年のほとゝとまうしそてあかつきのうちになりてしら
いてこまつりつるをとらうと　は　少有
きぬあてたらんなるらし　は　多ツコラ　日本紀　幾多ヘ
まいらへるのけしんへのおりへとしにて
いあきたんへのよろまつて　を　石山寺の仏の深恩も残らし
は　いあさきんへとは舞足ありのまうくを書いつゝうちそそこひてはかく
むきふはちおはさまくなかまめんへとしてすりめんあさきをこそ参

かくて人々とは近きしく仏神のうけおもひなきしや若人て其は一口に参りと
栗　云り或本にはちかきんもうけしきにしと云但院本にも舞人に
舞足のまされ少方にあの気を祈しは如純をれもまいりつゝれと全世
を如純せしと少方れ人は如守にて頼きふおかせてまいりつゝれ
女　人をあきき人へとうりをへくまうこふ人源のうねぬ如くなし
西海をん人に涉き人へとは舞足をもとにと云る義あ見て西国して云
義は舞足の本巻の少方れもすくとるゆましく初めのしかうて者き
を未りもしこれ居はおのまうり孫き有に今は此まいりつゝれるを初
給つるまはてやて如純もつらし是まいりつゝは人あさ名へ也かつ村
牛をもとろみやうそをう此は人の出き人へとはまいり参らを云う此院に
箋　人あさき人へとは弄れおもてうまし此人へ御念てまつらち可へるゑ字を
て石山の観世を残りしとうと云し　私云以上私此箋ノ義を見自身なりて
私案ちるふ此之義ノ門足ありは於西海ノ義にんれかしたりとて
人ゆられ舞を云ふは源のうちしまいりつゝも四子　叶れ源の人を
舞足をは人ゆかれそをらし須のつるき　舞足やとにあさきを
いふ義この純として存せとめず　又弄花ニ侵もろふうみゑ不庭

真木柱の巻

右大将の北の方紫上の姉なれは紫上をはなれきことし
おとゝもゆかり
抄 此君の実は源氏をはゝかりてもおもてよりそむくへし
いかにおもひなきまてそのかたもし
抄 実父なとはゆかりしめし
私云いかにひかきすとは弁乳おもひれ御余にみきさきそめく
れのいとゝかくおきれゆのやくそのまゝゆかりしまふをくへし
人のこゝろいとくるしきゆゑぬあるかたなれは右大将にあなたをさへ
おほしきこしきいとうれし
白 はしたなく 師 かたち 無二
大将のむかへの儀式しやうれたても源のよく思はしかりこ源の財縁
いらそとまうとのみ
抄 大将の家の北方よし
しこもまうとう
抄 いまこなの北方なしまゐらせよかし
てをつとめく
文 いまこなの北方おほ源よいをもよくしゆゑんすとも
いくなをもてつと家のふたしかきなりんのこころよ宮とてし
河 平月仲 巧 倫清 場日
なあつかたる
言無し
とらう
ちおとゝ
抄 内大臣の北の方よりは紫上の大将かた
ぬしつきのうすきとは浅きよしとおもひて
私云実父内大臣は弘徽殿女御なとのをさへひ浅きとそすと
んなゆくはかなるへし
こまやかならしうるさき
源氏君源氏にもしろき浅くとも女
おやもなすきはみんやをきすなりくへし 内大臣のんて
なよなかのもそいてて
河 内
なむ向かしかのなくきてまこのもしかれ好かの側しくさ
いうなるかなくもしなきんいもいかうは権若くしまし
側 尚書
なけらひかなしきをつつへのんて
いかいわかなかり
弄 内大臣もうつりを移んほよとへときこし
抄 涯の人の様にくてしん申すしし女御をきなりてこゑまは
いくとそうのゑ
文 内大臣れんよは北の方をつても女御の中宮と中たんとし
もふみうし出申して式は大将よ保しては新し帝なり
もちかへき式部卿にありは北のきまはあるぬなかりへし

されハ内大臣のうちにこれのまうてたいりにありしとかきし
あつまをき　　にほ 陵付　あつまる日記し
三日の夜の　弁 からみすとの儀式いろあしらせまてうし
秘 陳寒のくらめしをちるなしの儀式し
きつろへの日ひく　祝もの〳〵と内大臣の御使へまうし
このおほんかんを　秘 原の御ハ〳〵けまう〳〵実すなきよしと
又おとゝの御あきらめまて　文日
まうしとハこひ　実又内大臣の御はかんそそうしとさうし
かうとのひまふ　此怪原のんけまうすハへきれぬすなれ
とさハ〳〵の御事もあてく輪実事よゆうしのうすへとたゆ
つらんへのいひつうるとらかなるへし
うらにもきらしめしくかり　天徳かも在ちるし
すくせことなりきう　帝へ古徳のなきことし
さハあらしハわいも　兄かとれかんし女御名すもとさらかとし
松兵式衆移案事へし　安実里亭子君かう尚侍

し殿まうりかんよの姫まりのかけりやされやうもあうれ
ハいますかりくそへうけよおしえんとておわりくハ歳のへの御神宝なれ
えつへきをかけくしきにハ家ハ〳〵まきハ日ゝくしきまつもの家ハ
かなきのけりまりくしきもうるとい〳〵やあまハうらなからなるり
いもしくしきさもちゝもしにうさくまりとりまけしハまいりのゝと
安 節しくしきハかれしつへ回し懸く風流きすて
あはれハ御かりくハ来円あましの作し

霜月かりなりつね祭さかなとしとし
河海云十一月神事
一日供忌火御殿　　十日神祇官始御贖物
上卯日相嘗祭　　賀茂斎主進祓　家隆奏
明日斎院神楽　　上巳日山科祭
上申日平野春日　　橋本　當麻祭
上酉日松尾梅宮　　率川　當宗　中山祭
中寅日鎮魂祭　　中卯日新嘗祭

中子日大原野祭　　中丑日園并韓神祭
今曉大殿祭　　中巳日鎮魂祭
同日大殿祭　　中申日吉田祭
同日吉祭　　下卯日東三條神祭
下未日臨時祭　　下寅日賀茂臨時祭
同夜御神楽

秘　異

神楽の月し内侍のうちにあまた以下来くるをを云合とかうし
神楽すよりて尚侍典侍以下来くるをを云合とかうし尚侍
名必しも内ちまともあれ一律
内侍所よりておかりかひまゝく　秘　内侍司の中に尚侍典侍掌侍女孺
已四等の官也當月は女友内侍所との詳をつとむるなり

秘勘　内侍所事　又日賢所

内侍所ハ神鏡のおハしますを女の侍ハ同殿御神宝仍主上御名
來るとなかられよ　禁秘御抄　垂仁天皇御宇弐　崇神天皇
御宇より始為別殿御温明殿近代御春興殿欽是里内裏
白川院御代内侍所御神鏡竜ハラ欲上天而女官懸唐衣袖奉り

留依此因縁女官奉守護之

大ね殿とも　采女のむかしふえたまをもちてまゐる居りし
内侍所の事　小忌ひとはなし
又なとハまつく　秘　采女のむかしふみし
常宮寺ハ　見てむかしふけし　大ねの本意の見事し
まいのくしくまかりおしくとなる御事
おこの御しう　常宮寺の事し弟よかしきれいねうと妹乃
かうしそろとくめうとなる人也とし
大ねハ名人のく高きめん　采女の實人かうまうし
あうさまうし　さ敏　實こしうつかの海よりくそかめく
采女のさ敏なり
女ハまうた　〔ほ〕和　秘　にこやうよし
もてうくしこて　異　和しくう餅なと采女よ對して曲をと
なしらてめくくれうく　し
秘　大ねよ對しそハ和しくう様をめてうくして機嫌わしき

さもとはくらまかし
しらまくあらねと思ハ云かさ
紫　舞鳥へうちとけぬ様し
如　おもつれんなくて大将にさし定なし
たのまと源のくりしくハ知のへましきこて秘せるまふし
奥のまてまてまりつれんかつきうりとわすてはのにまうらうもし
弄　舞鳥にのかしくやとおわしとさんの秘なし
おとられおわしとさらん
如　もろくつハ只ありて衣しりん心えし
玄のんさ也
如　源とへの能しも合せけるうり雑と申べき
とれもいとわしう
如　うたつけなるゆへハ源の心くせりて嫌ひはきうし
うたつけるよ
宗のうへまてにまかしとらひしよみたし　哀れにも宗の上見えさいれ
のまう事を今源氏おちわらり給ふへし
いかさまにも人の心くせ
れ　源の心しもろつけうをつのりけりて　そろまろうあくせとも
弄　源氏のこうりにつ見くせとしろ分しとさし
御とし今文ま人のとハ源のもうかハとのまふなり
如　源の心くせ　かれハ今よりして大すなりへ名に人となりり
笑　人の心見くせとハ大将のうくといて心のくまあらへとおわく比
也伝まハりぬり　松玄此尼めつ源乃年月むつつまつうしき

ときれハ今文なりまのなしるて　いと用さつ給おらうか将御
んまたるわれぬと云まや物あ事とへし年まく葉しへの白
のくせとハ源の年月もつつをとそうそやし　田れくせしられとも也
文まて文いうかむ事こし哉なりし心なる後へしとさてわゆしいこま
人のうちかくやあんしとハおもりしれうし　将のすまれハおもひ
やまれぬわいまとつりのまてつくの人ますまとまや
大将のおかせね
女君あや見り
如　源の院おもらし
むくまふなりわりまゆく
玉鬘乃神しけとやらん秘るてぬきつきかし
すくまうなくハ萬随あうぬんかし
玉ろうれかやましきなくといふて
このとよりいまとに
源も前と此やうまて乱あつれ実て有き也
きうしき河也
口　咲てとし　卿ゝやまつ見すり
弄　宗まれまひあうふれのまひしまは似もてとくまきいかし気やめし事
如　つとくしきまあなり
すくまうなるとまれ院往の人
也　舞鳥のまおれるまし

秘
此詞を考ふるにひとく今源氏と人は別の物からしこゆるとし
秘蔵舞臺の実て花風源かしのよのつれ人のうつしに恵
ひしか源氏の君ふ物ふ為へし
さくのかなりか　を　まうつれさつきまみんかり
すゝしのそきつ　源の木下れうちを見んいろくなり
いとおしきに　まうつれさる
らうらいまうひまつるも　ぬ　懐妊のまうしと月
こ恋はこゝろあけて　秘　源のわし家か物してきこく人きぬかとし
秘云此義語抄ニ此詞なし此事ハ本ニ十一月ニいとおしき
わこをまへいてられおのふときは明年さるし月ねておはへ道か只
まうつれおまやせうしあへるまの川へそてくこ守さとて
くちおし　源のん中し
おてしく憐く見は○てもくらにに人のとしいらさきてより氏
は後撰　まひ人のまか円なりてるふみこし川おくし能てまそめ道源ゐれ
を　おうさくくしハ○ても今ハ源氏君まうつれ若よ密事なる
きましなりまてうり川まてハ家しそ川をもまんとし

并
なん人の物とハ様かさうしとし
此語のうし　一様勅云古事ニハ三途川のうし孫後世のうとも
源の川をこえ人きやうしあれと源氏不通してに今ゆるをおもひぞし
くる源の実のなきをいふへきを川をこえ見孫のにハゐうしとし
わきりにハ三途ときれとても今くハ此川とも見て源人よき丸
字
おり女ちくとハその地ニ家物さこせんといふうさうしかり
えそうに人の物をまへんとし此つをしとしまて源かに三途し
又ハ此にをわうらしいのしん人のせといふなて三途河民本ニ御哭ん
さられおかなりや　秘　ふうを是ふとし
是おうてに
らうせに見てくねさるまいらく冥途のとなの何いて丸十九年
は　三途河し弐大小河あり　十王経云　地獄の後とそ後あ
三川せにわろふみを見てらきまけりにハ衣をぬきくくら葉
右なるまて日此ちをの見にる界を　之東此あハ三途にあして
此罪人の衣をくるまし懸衣翁脱衣婆ともくあれおわちすとそう
河　水保日本紀　水尾　万葉載
年　此ちゐ見てをらくまけりのうらへ此見らは人しこつせ川

まをしきこえさせきもとは世のうき数なとみえさせ給ふて
秘 おやこのよせにはなれかたけて後のさへもすくせにこそや
此の義数多あれと只ことにすくよめるなりや此方これは古来さか
さきにはさるへきさしも又定まれる死後の事さささきなき
そきとなり女子は後へなさきといへる也おけるし
史 是よりは源氏にこそ逢へし
心おきされの法にさし給ふ
かのせいしまきころ
河 三途川のわたし　　　　秘 源の初しはとこと逢ふは必法なるへし
　　　　　　　　　　　　必 定し　史生日　弄 三途はするし
　　　　　　　若道と云説を用し　　河 若道なりしと云し
源氏河しくは必然三悪道あるへしとし一説云已落すまきとし三人必此河を
渡の初ふまくへきなりしといへれ　又云若石中ん冥途へ赴く
乃本たる物も十王経以下の文にも二十七人渡す小川受経之
若と後の若石中ノ義おふへからさるる
花 身の此わたりつかり　　河 弐説云法に此さにさつらぬきもきんと申は
源氏おつしとあるを後うらん　宿世の嫁合の男必此河を渡

おほとくにかいらん人は源氏の心にくさは内に見るもとそ世の
かなしきことをもおもひしり世にはなかきさましくしきまてなれ
みつし給やもさきまて此世にはなれ給ふまとはまつらしも女の方の
めまくもろともしにて給ふへからぬもとも但本にさこまされ
見えもかり給ひつる御通辯是大将の給ふ御満の門大臣の若石
大将是也　是本例なり
花 源氏おもつつけの先には塞かすとは河海たえとも遠かりき
但ことに実なきくらもなれくしきとは契と枕かしてかはらぬを
しらとは実にはあるきからしさるよとうてはかはれさきつり
川のほとりもとまんと心得しまつつも下つりへいるなり給ふまや
史 女房のうちひとつしかるへん三途河を渡も実すなりしそも
あ婦此よりひとつひともちなせさらおよにあさまるよひ後の事はまん
さもとし契らと枕まてなとめりしつらうにくもこ云へきん
秘 私云　秘ノ義死ぬる日もつ給ひしを
河 一本云定家の本には此本の細は花の山一本と同し山陰是三
せかくめのふせつをまたひのをすはまうりんにはやちきうなるへき

いおもしろく案也 さ縁なくすへきと読へし 其れハ六帖第三云
よしの川よくなかれしとゆきてしいもかみつらむ立つよりなれ
とき此けんともみつれなのすそつせたのよさかさきたあはきまえん
とまくと源氏は川とはよくもへきなるしとなきむ但万葉ニ
与奇逼歟と 紫式部の河ハ磯ておくこに彼よくいつこにか
ゆんよりたかなしといつ抄ハ若ハ一巻ハ此本可秘花云
秘云此上河海一本所々此所ハ此本も色及ハあるしまて抄次第本よ
於万葉集と川郎へし

高めやうはおかしきる　弄 おかしきるよふんさしのよし
少 実なりなきとおもひしたりんとかりわ
必 むつふともあるおりのすのあるへきとしんきしれはし
世になきまれくしさ　秘 子なてくきのひたりつのけのすかるし 弄少月
みなし海やせきさる　秘 くくるしはいはなたもとなつみきよし
箋云帆し琴を枕にしてもんと座つつ流もねと大和もとしらの

秘云以上秘し分し
弄 よく源のんくと今みるまるすゑへしとし
実なりたと ちうさまふ 少月
きくくるしく　必 むつくれそふさ当し
いとけしらて　必 源のふのすはいひるとし
らうたの秘いせる　必 源の羽し
なかめのさ内　必 皆時まてて束つ給へとし
とのかたとうやうじ　必 大かたのすし　江 領
あつみあきさうへし　弄 内へまいつせんのんなり
必 源の人ハせん宣つくよおもして後はいともかくわとゑひしとし
必 源の人きた先入門とと打ひしとし
秘云源のおしめよりの文家ないお遠せるとし源の人ハ先家仕
よおもして後ハ旅まてしゆかさんとおもつまる輪舞生人ゆれ
さんたるハさりしよかくされるをあらふとさ業し於秘氏治也
二十 二条のおとくハ　夫 玉輪の文養上氏文とて二条を宗せしの大子宗下本書
秘 文柳くし系号よ二条のおとしとるハ弘年度の大后の文大臣と ん

私云むかしの父内大臣のすゑはなしかり葵花に葵上ノ父也とも
二条と号せしとも云ふはあやまりし案君ふたつに住まひ此
巻の内大臣なり

摂政太政大臣──致仕太政大臣──玉鬘君
　　　　　　　　　　　　　└葵上

二条太政大臣──弘徽殿太后
　　　　　　　└西君　致仕右大臣北方

葉之致仕太政大臣 内大臣 むかしの父大臣ハ二条太政大臣の御子なれハ
り二条亭を致仕大臣伝領しめす但当巻に源氏朧月夜
にゆかりのあるハ二条の亭也さてもかゝる所にて朧月夜に逢
侍りつるとあるにてされハそも不審也此事に及ハさりけれ
こまかにきこえへき也　源のおとゝハまろくれに見えかくやと云々宜
又按しハ今ハ行へき事にあらすハ源の君をかへハ遠く侍る也

あはれなるをたゝいりし人も　如 むかしのかなり
いとうけおかしからさる　むかしの世の人はさしるわかれしなれは
源氏の宮はさしものとこそおほして朧かりきたる中にも猶つへきをはなちも
んかわたへき　如 心つかひをかしへおほえし
りしこにちかう侍りける　大殿のうへし皆おはしてまいりもとゐんにゆか
しほかいさかし内侍のかみにくし必有院大に参りしるへきすかり式大殿
のうへむかしの世の人にもかゝりなんとそ源氏の宮とはあらせしとけり
疑ふにおほきくくさんかし扨もなかなかれね源のひ申し九月も内
私云此ゝ義も不審し此抄の様又ゝの義も可知し此次の
に内へ参り給ひてとなともくしねてしにおほせとそのつゐてに
やそまうけくさせ給ふんのけんこゆきのくと侍り見ゆく案
しゆ古本ノ義…
うち人参り給ひしを　如 東宮あるハちくくに大殿の亭へわたり
つきんおはしまさりとおほしいつる給ふなり

弐まつりまつこひ下れのうひよそと帝へ申して　森子も　梅黒ハ
いやと思ふ人を決まりして女房に人もしらんと
うひかりて皆神無月のすゑと申しかりとし
手くまのひらく旅人　　　　　　　　　　　　　　　　　女　さや乃風流のしきりすまて梅黒それにねと
　私ら源氏らにしろ何の人へき殊にすすみてふるしさへも旅世の人
　出と見らうわのふ有さ若ふらく旅のやかりう文は余の羽ま門
　待つきなりて多く集りて大和の如く旅人へくおふれと花さき
思ひその下らう　　　　　　　梅黒の住居へ案し　　　　　　のすれ
うらあさて旅てり流も浅け付らい　　　寺　小方の御宝にしちすてうらまて
梅黒の少方物のもよりまつひく年うへ下かは侘田よ那にて
よろ何を申しにてあれさうへしちれてさまてろつてろひさ
小の方おかりふけくらんきまて　　　松　大和の本暑おり
梅黒の守しと少方ふと人の西ねれに浮すをもの上て梅黒の
四ケ月あいねしもしく客人の守也は少方の服に男子二人女子二人を京都て
まさひる　　　　　　女　大和のましは実めさらうさいらうなるへき作らう

そのやさもらんあのひく人し旅りきろし
むこちりむしきにあそろみまへつ　　　松　一方いしきとし
　女　物のさにあらら神し通居のなくさし
人の浮んらこき　　　　　　　曲ますくそのへきまれ年こさし
女君今日おもしろ　　　　女　先帝の都まし
きりやんてもあさはちりてんこの　　　　先帝の親王し
いらしうかりしつけは　　　　梅黒の本の少方と文弐君宮さるかりつきまと
れらさちすらふも　　　　梅黒の小方の少方なるし
おやしうきの旅け　　　　　江　孫とも子千
きのうし旅人まて似のまいれ　　　　松　夜の物の気にしまりてひのうて枚
　多あんのをもらちあまてむもれておかりきろし
らうしんるき　　　　　おの気のおこる時はおんらもるとし
よ年もわくま　　　　　むけくろと小方れなるもし
色んてる君物とか　　　　梅黒の本の少方と称介よいも旅りねと実と家
めつむしう浮んらつる　　　　ものすれるくらちれもさくもてさろし　　　仙
かれさうひ、あきそて　　　　宮　源氏君成もうて氏君子ら通なきまくしいん房の都なへ

秘又おのゝ子深く蜜通を致しけることさかなきを嫉しと云ふかなし
んきよくてもくいあひろかを　んきよくとくせんしといなり
花を云もくいいさしのあるんと　一本如此頭之仍不可加干
たちつまうん　第四の作なるべし
式部の家きこしめして　秘式部のよりまかりまかりて
へきろく　給はりいろやきそくいふ往のつし
むときてやさしつへし　ほさしきいそへつくしき
河松浦川のの河上の家はおれをまて　やさしとうかいさんあつき
私云玉鳴やこの川上の但玉鳴川は行松浦し同事なり
或浦なり玉嶋川ともあり
河何とてかれゝうつにきぬもし年比わたらん　とて　やさしき
秘ほさしきいつうしきしそれとらんとも　やさしくてよろし此めし
よのいわんこるのさいは　秘こるさといわんあるそいと云んとりまさいふは
又あるさとい式部の　家の宣ふなり
いとへかさんたりまめに　さりもとをも　秘梅足のるにさしつんと
も家のわんりきていめくゐきんとおもひてもひとりあつし
文のさん〳〵此あいよひさうてさゐせんと也　式部の家の亭此東の對屋し梅足の少方を
おやのたいわたり　梅足の少方の人也なり
今はりきうへの宮　必一家ことろ定とし文字　陽あき南面なき
うらそ今のみぐひ　必うら女人なり
かんしやう　秘二本上如此云て梅足の少方の男を云し
けしあやまり　秘わか宣し
式のおろ行しきるし常はんうつしく大尾うかゝし
但あなしのおや　うし　少方の物の宣を本にそてうき乳めし
むとれいく　河理痛
むとかんか宣た　大おのにむとこうけらとは玉方の
んまいとあをれと　梅足の人中に少方をあくれとはちるまかむと
さのふつれ　美梅足此少方に此まかふ羽し
秘梅足の少方に此のふ羽個人まい人とい物はいれて　とも之うのと
やうくこてみ人きぬそとし
いとめもとうしける　少方の男もとうまけるかまさのと

うらいくさうちかけり
こしたちいさり　あはてわかれをおもひあかし
世人にも似すて　弁　かの字をいへり
必　おなしけしきにて家経に懐旧をもいへきことゝし
ぬさしもわかるゝやましきかなしく　梅壺の家ハ昔の今に懐旧
しつかまへてもかんなくんと思ひしに弐郎かよりもしとかんなり
こゝにはさきもあまくへきしきとして三郎かなしたきくことゝかくし
おかしうともかな　けさの字気味ふかくにはあしくみれはかくと
いかけさむ初し九少本同之　松云たんにはおきそてハ弐郎か女のなんたきそてし
ちをまつもとらうへとみえうしとなし本の初よみえたり
とさ面かつる　先まき角まし少将ともとをおさへおさきに見とて
女のなさなれとらうかいつき　女ハ在ま見たりき元に世のみるとさしに
志ちそてさうぬへし　松思か女ハ在ま見なきは難なるよ此少将をそ
かのけさくにをひ見はいれにひはあなくし
むとわかりかんさうへんなるふ　こゝに一途の御かゝとかん深さとたかんハ
さうしく未熟にきつらよ家のはなりそてよへ所もおさんしるへきそし

あのきこしかし　松女にそてかれ父母の内にてしまへつらすの給ふときこて
さりやうあふて　はハやかましき成かしの氏水原二筆之ことハそこ
かゝるていふやうなりしよりしてまへい兵庫の明なれる禅し
少　さうやかに思惠のんし　松云見まよかのさいふるてきる神た
身てもにおかしときつゝ　此れ気けしひまんと三郎ていめのさんいまると
見りうるし　松　きうしハ勘解由し
玉ゝもうし九条勘解由の司よりひさかんとおかなそりとし
いし給ゝけよ　少　ゆしやらんかくハ宮をあてゝうし梅壺の神し
松　如云大和のしひのまて少将ハ嫡嗣してかまふとそるなしるし
御めしうるねく　はに三人のうへし　とうへやきてうし
ちよそていまんかうかしにきれなしとめあてさりし
弟しうとのよ　大和物語云かさいし君の大いまるとの伊勢
蛙蛉日記云をのゝ在原けあしうこく
日本紀曰有容人生男女者四人
　　　　　　　　松　在五中将の君ハ大和のたちかし女房中将を少
あもか君中将のおりて
家まさつ母へしいつまて大和のをうへなり

かしこにつまはしき　此女人さへあまりぬるさを語くらへて
いとをかしう　少将なんかたる事也
ころうおもひけるにや　定かれもなかし云明
河　鏡　巻　蘆語抄　雨中ノハヽ木ヽノことしあらし
細　少将は河家方のうちにもふかく文学のみちへたつさへのみこと
葉の道すくなく人々と申ほどのものはなるとはいはんいひさとわけて深きの
ゆかりはふかく上下なかりへてなれぬ事は今ハ今ハしかく
いふことわりさし侍しなふてうちさはしきものやうにもたけなり
耳なれぬはしめ也　私式部丞語抄ありき作さく
河をゆるし此所にて少将の詞し家をきちの事もてもつはらとして
のをひたちなしとつまことりとて文武ふんふの道をまたくれ
まうちたゝしくはしつかりの少将らんしやうしもすこしまち方
ゆかりとハ家方の世人のやうにもおもねりて家のみちをさく
らりかゝるく家ともしくらはしうまれたとは
家方のみちといふもへだてしめまて少なれはいま
好くまて此度よまうしくもたれかしと
かなれはしかくと
いとさうやうかな　河細々侍　少将みゆるさ思ひやの程はなり
ひまつまく　河あるし同字せんまん
うつりいとまうらまく　異かくいとうらしむ一本のいときう猶さて
ゆうていやさし　まつらいのあはれよりもたえかのさへなくけふらん
ときをさうかしこみてさり
学の道すくとうつくかいつく　私ちゑの詞し
式部の家のことにこゝからはしくらやうさ勿とすへし
あくらへく　少将を心ひかるうなり
かれうひ侍る　あしろはかなり
むのうてなり　私もらしのとまる人とし
私此又ハ大衆院より式部の作ハ式部丞と
うるさくもてきなく　梅見の家方ゆるへのまつしけて
やらん家の定調作とり人を源氏のうちゐてあるらんとし
みやまうつろい　衣のまへはゝりとりそれとし
おかきなとし　源氏なり　異守に信木のうちへて中はあるひとし

んなつらしういとう帰り　源のいたしうしういとううつさんへまつ
やうやうて言のもとに心まゐんかぬいてもとなりうし
此中よりく　＊むつゝとも人ハ此中よりてましませとし
京にかいうりのつろとも　武蔵の国の隅田川へまいり給ひてくれなかりし
まんううあまりも　梅若のうつゝ猿をうつすり
ろうこたうし給らんと　ことに聴しまうにおかりして后の人と云四ん
あしらん　名をは少将といひうさむろさ母なり
人の母つさハ　＊少将の妻
梅若をうつしひしとつくしと云ひけり
世の人に似ぬ生れつきと　家の親にものにてうつすしうれしと
父ともておかりしゆしうけくとなり
いうてうあんで吉田まんとうん　家を出ておりて又京の中へ行く
をきましもめんなくなきましたり
おかしの心の字　＊梅若上なり
こらんてやいうのしのを　此少将ハいうとまれハうくいてあり

あゝねさ母まておもひつく旅する人の　武蔵の国へ来て是ね様まて
思のまゝところゆへり他人へ他人むきたる心あり
京の母よ　他人へむきよて母の其ましして後方と言し
かゝ人のおやしうち　梅若親めくし
む　是ハ梅若上を父のあるとのかを少将吉田おちともうつ此末を大
おまかのみゆきつを梅若上此あまさと父の心吾ほて恨まるし
あろうを大ねよあうもなまる其ハ梅若上のわさと言わりらく
たまつうと武蔵のうちまハいうるし
こうまハともかくもおいひや　＊ゆしうたいおいかくし
まてたまひまみさ母をみろハいりとれまえて
＊ともかくもと少将めくめまし　梅若上他人へむきよて出生れ
人しさて源の源の心をうつしひとりて武蔵ぞ京をとつれなとれ
うつし遺恨なりなうされとこの在所此跡よあひつ此世まで
と母の上此吾れねまってこえの本とこまいらしんまへても梅若の少将
まハいかとも思ひ恨てのやまいとりんなりしなんふく
様のまふかなう

いとまいれまゐらせんとのへさらひつやくらしきこえさせておらん　松宮此詞常ニ似たり

松　うけたまはりてハ一段ノ文物語おかしくてつゝし

大との少将　　思上し　　必　帯刀の詞

いつきむすめ　　奨　思上のむすし

必　思上ハいまさら人のいつきむすめにしくはあらず家房とさへ人の中よせ

なきやうにまうしいまうして人のうへまでのたまはせしを帯刀のむへまうさし

来つるかとされつる人のうへ　　舞姫の家房のやうをさくらう

人のたいかやうなるく　必　式部少輔をなかをうつ　尋常

私云式部少輔家の兎角おやうなきとしさやうにのたまひ思上ハ

これもむすめまてハなきうといゝのなり

日ひとひいりなく　　いひさしもんとの舞姫のしやうし

それのみかんてうくまに　　必　帯刀むすめこれハかく人来つなかゝへてまゐらん

雪うちきちれくらいつるか　はをさよふりつらん　　おもしろき詞し

これもいとうことを　　必　少将のもの

ひとくまてまつつて　　かことつけてなり

またもいとひけらく　　必　河海まゐらくり

紀　日本紀第七　賊有欲レ害レ王之情　王謂日本武尊　放火焼其野　王知被欺　則以燧出火　向焼得免

河の音まて賊陀の燃しまた十寸ぬかへるをいうのへ向

焼のかひさし風もへ人の腹立てきなところさせちりも於時

ことをもうのゐといひさり

いとおひらける　　少将の様し行こしらゆりねやするに多ちいおさへて

舞のあふなき舞姫のこゝかしこ　かなり

かうしなとさへのかりけ　　奨　とゝろさねなり

松　格子も放ちいまたしもおろさて内なり

少将さまりしきこゝろて　　舞姫のさけかまつ風さむくはとしけし

おてあけぬめりや

河一本　うちもおしいそりもんまゝ香かつおかしく行のらも云けまひちよ

みそちうしまふ　　必　むかうへはたてをせしまて少将もはたをたれゝし

今はつきうこゝろしも　　必　なおりれしくつひきまて空をみ

かた同じまいらくかつと　　必　帯刀の詞し

殿の宿直ハいみつ迄ありしとまつのすゝめし

かはこの縁つゞり　是よりハ又むかし〳〵取入れのおかんとん
若しき柊といひきゝせまふ朝しの夜のあさくしかゝねとそ
て今より体をなつむかし人のりひきんとしかこつけまし
おもく白らし　必 源氏円石にし
むかし右なり　旧 ひくり名まをわたし神のけんなり
ふり志りめく枕凡いそのく　少方ま清思あれのてとつやとのまふと
らくまかなとすくらし　むかしとこへまうしてこうまのやまと
めんなとしひ志しせのかなり
おかのまかへ由人　おんあゝやとこそ焼炎となんてらつぬか
としひ志りせまみつうなり
なにうさみりまふくを　必 少方の剣し舞足のうたとまりまふ
てとなとこす　てみえもうしまれん家とあかもりつくてのゝろしろ
為しとし
余所ようくこさうさる　必 おのし路さ中ほれなり
神のこわりをさけちんりしとなこやうま
旧 ふりて給つくまかく所合の夜ハ神のこわりハとけ云おわれ

必 方を此斉あり　嫡娘 日上 旧日
ゆ文とりひえしく　少方れ文とりてとこしもせて舞足こ焼ときまする
こうゆくハ　少方なり　夕
由あれいふりなれてれつれ　おのさまつのまかさきのふなる〳〵
なら附いつこなりあれして　舞足の人中なり
いくとるし〳〵月まと久ゆなりゝうれ
むかしへあんてみてすれ少方まてハよくかしつれそとそふと
日のうつりふれハ家のうつりつ友んあとそふうちにし丸むかしつれ
うこへのいとまかされてんもまうつとつゝわとしあうと一旦れんを
いくまうへハ少方れおんつまくるこやふまのゝるといひまつるさ由れお
しれ我りまみつくなり
そうかなりきくと　むかしけうへのたくちんね極まわてまぬし
ちいさき文とり　是ハ又まへのやとくしまへのハふせ草乃下り
入る大なるゆへてうし　必 源し花日 是ハふとこうま入るかいくし
あつひなさき衣ひくり　舞足のさ由をとふし
おしくまりさ由しく　必 男と女し 冥日

無人　　果忌し

さうひよ人て忘しく　いつれの家よりも来て盗みするぬす人
のうつ示し夫おれの家を遁法供の人を留めさせ置きて是をほめつかふやうに申し
まかせおきて　なかく盗みあれ共といへ申まてやうにとをうし
申おかしなとあられのよや　必しかハ世し少方の人まいらせく
もろくしのかえしもうくべし　弄
ゆうしくいハ　秘少分なり
おおきなうこの下なりつかひくりを　必神子川へさうかされ候　弄曰
おまれ出しうめしていよくさきしめなりぬすつとみてし出えるを
見へし以上気　必出まても古今を川
に六掐
無きまめくこの下焼の寺で晦とも家主うりさとハ志るを返へしやハ
いけまふ加と　秘汉懸し
人のやうなんあつき　は危く徴し　危うくなり
私云やことハ只初し危うくれんにハ見えうけし
む
あんおつうハ兄ん承せし　秘あんあつさいへてもあらぬすらり
私云花るのハ色不富只しうあなれすもの同し初し

うつしんとてりくし遁そとし　おんなりぬ方を止うるもて方の見えし
きまうを返くし　以玉うりれまうりをいそう
さおうり申して　サナクラニニウテ文居　日本記
らうかれ人無うれとハ　昇物の守し　秘大おれの人も是ハ物の方お見れすうわさとし
おんしを付うく　大おのんか中し
よハひのく志う　秘呼呼し
とて一東をうれひうま　秘行ちめうちさくもるのとまうるすし弄
花物の守れ加わセられてうれひのましてうまくきまくうひのく志うし
かくこへ出がさ　むうへ余あさし
よ人まハうま　　是しうかそのてとハし
きもくに　　汝本落　風深めんもうめまくなるといふ
梅見
こうさへうなみでまし留もまたにひとうさんへ遁るさる家の御留を
よハ鳥魚の春まきうし仰うぬひとうさんへ返るハ大人とうり乃
火とうるし加くしきさ夜ハとうらしんでとうへさうちなり
果
留もさよのまれ字脱表字信ゆし
留もよハ鳥魚の春しうさ脱夜字佩ゆ　私云むまる独さうん

つかはすとてよみてやりけるとなんいへりとそ此歌は支へつかはされ

は 按摸

ゆきふる夜ひとりねてかくるとてあるさまをかくとて

雪のふりける日女のもとへつかはしける 恵慶法師

又

かきくらしこゝろもしらぬ秋の夜のあはれはいかゝうかりける

あはれはきえしかたの山のあはれもうちしらすかな

河に一葉に乗て 又清輔此二首の引哥不載を

けしやうす

は

実陰もたえしきみん 秘 実なるし 妻

しられたるまうらにかさねぬまうくきえさめき 風流の夜部しむさんへし

ゆくも思ふ時いつかとおもひしくと思ひしあまいれかうのやうなる 秘 夜離といふかうは

おもひもひとつわれく かりうれおきとあかのんするあそこちそし

のあかりしと 必 大あかのあし

あすのかたへの 少 此少方去るはんかまへとしまうと舞まふの

あかれはてうらよもいつかれしかり

まうとき を 気練し かそくしきんし

あかうくのまかしけのやもくときあけ河かれ

必

少方いへるをあのけふよのましきかせは大和の清蔵来去法

しはくらうけりめいまかけり

は

あそらうくれまうしめやもくあてかよきあまでたるさせけ

られむ為云紹田し祝とてしかうとは合数しまうんれたる

うきかうしうをのてを今にしおいかるしきかたしまあるまさせ

はしもしといふ人のきうんきやうにもあるさされあくといふかけり

秘 云にむはあ信か詞お遠まて秋ノ葉なと見えし

ゆきへられまつ花 は 愠むすあし 火くうれあまのへくそすし

今さらんし うんしいうとむんまう

ひとうのくこうくもひのくうしきまあるあまれうかれのちのこたし

必

独をみてうかよせくり 秘言少方れんをとおもけて語り

尋

前まとあるる菓物の火してましせうり

みとうなきけのくろし 末工君の詞し

はうくしめそるなともあしうかけり

は 傷イ冬に

陶といひけし

うやうれんへは

秘

ちかものことのりをとわにいさそて崇徳上君

ありしにかはらぬといひうれしくなきせらるゝまゝにえひのかて
なさけなきわざよ　如 是はなさけなきわざうしろ手の悲む侍し 文
花 少将の北のかたの原りけるもしるを情なきことはのまゝかし
私云 花鳥の義いふく
うきことをえみさりけれはあくまてくやみ嫌そいてもさうらふ
女 たれのもおやに　九 くやみ嫌は後悔するんし 少将の弥をとて
られたとし　紙抄同　私云此事侍抄義分し安楽しるき事とを
少将の北の方のみられたとさへいとしくたれのんとりた
かゝる又けえとられ原りるまいよく耿布のそのあるうちなり
ての和かう　少将のややらるゝまをもあるうちなからさなて
へやしあいかいりとなり
ちゝをんま　に 少将はいつもにとつね由しけふ二仏之中間と云
如 むかしも少将へとよりつゝて二仏の中あると云ってしまてくさし
一根そろれ原るて　如 むかしのかあるねのなり
久しうこゝり　むかしのかあされと舞姫のあのうちなり
北の方のけこちらく　に 女骨

私云 女骨はこゝらくくしこゝらくはいとしくまくありしと云んし
あかしきこともとつき　あかしくへよりつきれつたのけれはいや
られなそといひおくそらうらしきるみ又いくまてにそをさ
りうすのしまとりれ原りまてころのありとまし
とのまわりの子附を　舞姫の家里方にもつねに侍るみ
方まのとおりして少将のちゝり（いよりつきけれはね
あちらうらうそそ　舞姫の男女の子なりし
女むかしころ十二之いう　私云まきの北とよみかしん
ちはのあんでも　少将て内のあんしなり
ちゝ文まきは　如 弐アよみし
内くの院よりくりの　父宮はの母うし舞姫のさんやうう
うけへくされとつてをきしんかうて 様同し 原のうりまかれ
むかし女御もなき事とし
おさなう　に 女面なり
とのかあかん　父宮のんけれなうともみしより
北の方ゆんかは　舞姫の北の方し

世中をあやまりしり　此の方の本なかし
かくしやかし　此む人の弟さんよしなり
人のちさえたそんさまを　必 つとめくは堪忍しかくさききかすを
当主あ人きとして人のさようさえたそんさまととんちそしかつ
父家の方へ立帰りしと一人おやともあしかりんとなる此今出立のもし
おせうしとの見ちくち気新智い　右条知智武アん家の子此方
兄弟しおんとの為よりつけしんし
中将伊佐氏ア大輔　弁 若年智の舎弟しの門武アんし家の嫡とし
氏ア大輔子伊せうあんへきうす成倫ん一勘菊若伊皮成倫し
らしいろかうしひきりねるひとみ
此程は大将の家中とまかりしらく伊の家のうちあし
せうとりし向らく　武アんて家まあひ伊の家のりけさいせうんし
うらんかなのく　必 かしいとかりてし
あおまえせ好すんま　此方武アん家の家れたしうまおりし出
流まてくかしるみと　来るへくすしあくおし法退旅なとうかう
きうへきは立てしのたけ　かしおとへまとはもきあしきさなし

母若当まひとん　此方方子ちをまひとへくいひきりせあるを
らつうはんかうき　此方代家方のうかをれあふ
をとつくを伊ちとん　はしぬともなうり次第とりかりてしさ
思ひつかいつかてし
おひさきしとせ　あらられ事し
姫君はとえりたとも如なかつとも　志来様の来ちかり
は 山城のこまのらそのくらう一ちうとあらうくなかり如家の男ちる
松立此奇まおかうれ
おとこ君うかいさんされ　舞見の方人り通りかへしちや
必 父の作をとぬさくすし　只今は具しなりまかて
男君をとつきて田さうて中くれしりそ只伊ふあせすとし
家のおかせんおりく　具門まう人まうかりん所のそと母の立まかて
少 武アんて家の家督生れ様してあのらしうえて伊ても如しか後は何
しかんとし
かれおとしまちの　必 原と内大臣し天下代をすは此二人に継嗣のかへしと
んとをへきまうりうとさんうまちつれく

少 又ハ見あらハれてと云本あるへきかあらハれてといふハよし兎角此方の
後の男君のあて君ハ立身の事をさまへとりつれきこえまほしけれバ
ゆるさんハそろハしき也と　少 たさかさん人ての趣し
むつかしきわざになん　好 作者の物くるしくに嫡女といふ趣ありて
初て継母のいひしよしりてさうなき也かんらし　実少
或ハ作れの物語といひし此継母のまゝ子をにくむ事かま
ありける作りしなりとかきけん
はまうちうひ人ハたえさる人ハ　継母のさかしにくしたるし
ましてこれ皆さまく　弄 父みとしく歎かるへし
好 少将北母と云歎かりうかくなりてハさりけりける北方
出来われハもさきなくとおかしかるへし
私云 家のやうに現代人ハやうてさく悔るかなし
かくて雨わりて　中く落ちかゝ落窪に舞君の四郎
ともくなさしとなり

日もくれ帝かへりぬへき　みわたしあはれなるさ面し
いとうれしき作りなり　少 風の吹あれんとし
姫君ハ猶いとあはしう　真 末摂君ハ舞君の姫子さし
見なれて　ちかきいとめひとしくおもふて
いぬきんとむきこえく　実 父ま今かしこまり人ひとしてとし
好 姫君ハちかの姫子さるまうてかく尼よくる家がしらすとし
来てたかしまりなんつゝき　姫君の父ちかきの家あるとし
むさと母少将の心やう不足のつゝかり
人ならいとわりかりきりんと　ちかさと姫君の身しきつとし
かく言いんに思さまうこときさんや　好 日ハこれ作者ハおもふ北方へ
こそいとさきむの人なれし尋ぬる人ハたなるとそ
私云 少将北方中になし世よ手と楽して或る羽し又ハ弟子猶れ
九 ちかハ只今夏りて北の方をおりにさて日ごとにいりてりおは
せんと猶喜なり　私此筆一段也
あまようなるおほひしおりその様　さかりしおあるさ面し
姫君おもひさま父のつゑん　同 相模文依

秘 あつきてしらの名によせたり　弄

明星 今はとく宿られぬもなれはうつ末ハ末つましらハ家をさすなり

秘 あはれなる云し心より末ハ末摘の君をいへり

河 桂梓　日本紀　槙　末摘花

孟 まつもしらつる仙人いさしめのかれたまつろきさか

同 なつかしきりのしき事ハ宿りまてくわうれねつき月比しそもれ

なれ花といふうけもを何よりも名て有るへきまゝみのさしらる

秘 桂ハ寒仙の名なりとしてなきありとて丈やうりと帰

つき見えていかさとし　九わのさしらハ寒にて地しての寒仙なる

はしらいかさとひなるあてとしきんはさてア分事ハ家いうてし

と云んしう桂よられハえきとや文ゆるし　式部卿宮を

すゑ君　大和の女女ある人はれ少者也女房中納の君の言をよ

中納言 みるく所なり

抄 あわれとみるものかいもみくて宿りの君やうけをするへき

秘 なる君此ありハ中納言

弄 うきを思ふへきハ志を新にしたへり　秘日

本との君ハ寸かんてて宿りの君ハりをたよるりとしかかり

私云 秘ニ云るる此のうと中納言と云ふハ恨し末摘の君をさして

云し末摘の君ハ末んてて宿りの侍従ハを見たらんと　草

くてより侍従る　末摘ハ宿に留るし中納ハ少有につきて帰し

末君 ともかくも宿のものも見られけむしつてもあまく心とも世と

秘 秋も柳の人きたとし

字 それも思ひを思ふへきん境もありとし

く同しまてそのくて見んのを思ふ　秘 文選別賦ニ硯齋木於古里ニ上云り

君のもとしやかの柳とゆくもとの同しまてまてりてをしての

私云 硯齋ハ謂々 硯齋木於古里 謡北於水辞江文通別賦

君のもとも心へてハあしくて　秘 又ニハいひての見ならへくもとそのさるし

文 大和の名まもそのかなりて見さるし桂をと送りし宿此名所此

私云 月しらの此末へとおもしろくう紀有なり

名まりの同ちとらて　思しり式部のれうて人ありしめても此なし

いうらハ事しらり　秘 一定嫁夏志く後ハ古里へ立らるう

あまりしさすなれなと

ちく小方　を　むかひ後は宗上のまゝ母し
如　宗上は継母し　奥　ようろこ人のかゝし前に此表ま見えしくろう
おかきわらく　継のまゝし　式部母少方の初し
もしかれわらくさき　仇　雔日　罠文選　又後漢書賈復輊歒
論語距歒怨月　何　歒　史記云一人　敵不足学々万人敵
はおとし字不引及
女御なをこゝにかれ　花　吟泉院女御式部か宮の女し女ときり
入内ありし妹好中宮とよ　をされのまつるうをといふすや
如　秋好中宮と入内させて式部か宮の女御をハわしかうやうにおつるる
は中のかうみをけさりし　奥　世の人の付母を　そかりてはなめちろた
をなかりしうらし　そか人ハ又恨よ及りん好ち知らす思へし
如　はての人おちあつりしうし後人はいふいをもなきしは宗上の中う
つまをそうほりて世の人うつりをそおまりしきかをとし
おかしけのひ　恨みをそろうちてやんとかて式部か宮の心そ宮りし
世の人をとかひおし　世ちりもさかやうにはりすうそれさ人はふ上
少人すかへさをしまてましきすそうし

人えかうひよさう　如　宗上を寵し　給ひて五兄弟ありしてそくし
まうわりもなきを云し婦妹弟兄皆列土とこそいろ地をとし　弄
わらけまそても　かりふ　奥　婦妹弟兄皆列土し
女めしくそあれともおさりし　を　一人のゆかりにひろくうを
こそあれと切えさりし
如　まうろかまとろつきをしく　むかうのよ侍をさうして　注
むかへて梅壺ておもをやりし　すハは宗上の造ゑて中も此のをとし
その達ふらしのうるいうわしくれちかうかまりの切不わりまし　きと
とそさうやのくうつきよす　へい
何　はかをなきくんをかけへて云ぶそのるへ手をおふてふかなるあし
かれをえつね山のかねかさにおふかなる地をへのなけきせ
を　河海にハてとしと白と　切らハ男不志かうなうへのえる則引云
和云已川多不用え
よおふかなるとあるらをむられ給り兄ハ男すし　ちかなかへと
奥　給れ給る　まやいかにかうおしちかうとハ実はして梅壺のむねをと云
式部の宮の少方初し一抑云そのれうるをハ家男をまてすうるへし　初し

おもふをいとおしくおもふより思ひかはりなからへとしたかう
弐条のはゝは源氏のおもふへ思ひ入るをかくさたちまちへ此へ
それを母のまゝにもちておもふをあはれとおもひやる源氏もさはかり
かんめいうしさうてねえいとおしくおもふやまもうつれ年比の
いとをしこん見つ程小　松下云　少輔君のうれ少青をうれひすとて
人おもふ少人源の宗上をあはれとして
松云あはれといおもふに源の密通のうらをいふて　以上少輔か
又秘云源のおもふに思ひのふんあれは輔君のやうなる実
法なき人へとひとつて韓の心のさよにしつさまふといふし
又秘云この返しかうし給ふは源氏のおもふに密通のなし
まてうたしまつるといひて後しも此人の門をこへおきよ
けんすは西しき親子の中に知れはけうさきなき輔君なれや
らまう実にも没女をしへ合てぬへとぬまにうて家はしきなと
中宮になしすへは給ふき事しといふ義也
いうからねといひ給ひけ　源のわうくみにおもひ給ふといひつ
つけくく文の少方へいふ詞也

心はあるまゝにゆくや　弐条にて文の詞也
よにみんつきちまし給ひね　は弘なり
源氏条を弐所にて心もおもむく此なる文なり
かしこき人はをつおもさりし原もしく心てもりもてやつするをいりのせられや
さおもひて家をおもふかなかなるとしてはある也
源のも道は世人の見聞に弘つへき人はまをあはねはいやうに確懸を
むまをうしろ子細にてあはあるれは確懸をさくはゆきやうやう
心うし家多れ不孝なるへしと少方に對して文の返事し源は
弘をはさせしと家多を卑下していひかなせまうし
それなうて皆れなこまし世のもしてひいらく人もいひぬいとかしこく
桐壺の詞しつれなくてといはとなきやうにて清少納言の附乃
人の忠比やすに謂くて家まゐ世にこう人の程をさゝくにつき
く苦悪をとらせまつるなり
おのもとひとりをいはきへきゆゑ　秘御覧のえしうし
ひとしせをさる世の乱にきたまて　弐条にて文をかし御覧は上いとなと
まふなりし女房にあたる妻

さのさるれめいおく　又はよめいおくとあり
は今生の面目は菩薩の又式アム家の舞賀せられまていらし
如舞賀のすおまハ六条院作りなてせり陪へきあつまし
いうりをりまうるゆくとけたるらんとこやてふう
いよくもしうらく
由らくもちき事ると　を
のろくしきうまとなるへし　かうろしきこともなるへし
さの大きさるれいくてさくるよめなりきり　ふる子地式合の小方し
太郎の君わくまるつりまうてときくく　弄
花太郎の少方の舞の法りとへるろろひるつるすとやんく此まて　主盤方の方まて太郎の少方
まうくしきなりひのやうにつきへ御まてしのすめうるうる
太郎の人まおりて舞へれらりまとしまうハ舞合め様猴つ
ゆるしさいとうきくうに　を少方ハ舞見の志る気きてうりてそう
よう後りねと式見て舞のさしよくきまふると
は月きうりといひさそうつまんゐ別るちきいはる人のみて
舞れくかろくまういとるとそうくきんこおもあり人あとい

おしきりこうこうくれく
私はさハ忠皆家の古真行しされて家ハ少方まハとうめる
きれをおさうりしるへ申しおもとんとて人あいとおしくく
おうくへ状様術を信く家れ方りとへ見舞まふとみてしらう
かんの君まかくおゆしき　　まうつるし
私いうる田をやして御やの法りへまいうさめふたる
はうりさ田とまうくへてうりまふたり
ゆくんやもくい　　又舞れへまうりまふまうなとを追ト
さんあまハよきとたろの気あしまふなり
まてうこすゝふく後へく　舞見のこゝまおいゆうとてとも
すまるのやもくさんとも舞をとおしうらる様よらひるし
まうて法まうちあておかりたいへうなるとおゆういくとおもひ
後みさ田なり
とうしうおまひ　つのこゝまそろつうし種なるんて
かの舞ハ志まふなるん　家の法へまひとくまふすし
人の少アんろうを　由らく由いのうやうかるいならしきうるれいうし

うちにのめきそく　少 実の作者へむけてこいつてうんとし
必 紫式部なるべし　式部清少ならぬさめしくまいりけらんとし
しきらんの跡を見るきの下おもひのきれさしぬき
ゞ人のきそね、絶こ　花 表紙ノ様異を用るなり
必 めくとおもひのきれさしぬき　キト・ハ綿し織物なり
栗 同られきのきしぬきまや綿ハ生糸をもて織しきれさしぬきは
めす様なる時で用に風流の時用ゐさし也て　柳の下かさね
栗 同意ハ以下の花ともとろや下がさねの文ハ何色よりもねすまや一蓋
下かさねの文何なれよりかし様　様ハ十一月より三月すかし柳ハ
表色ハ柳と鶯を衣ハ卯花をも同様なり
かさねハかけけうらんと　松 むらつよなりへくさ一統とし
むかさねハ多くひきらんを云 同しかくひるがへしとなあら初し地を寡
かんの君ハうけいうしともさあつまつまでても
少 うら同なれとハ舞乃なかの少方也文字の之ハ輪かあらそうし
必 舞恵ハまうつのへよハ不叶しを於ヽ入りみ也少方ハ今に家なお
かさしおかつ草ふ事とつきなくうつよぶまうつ此日書し舞

恵の川つくろひしうせよ見えゆうもおもいれとし
家よりうら姿えんとて　式部云二ツへまいりて舞恵の夜ふと
やまんとなり
まつらせ
りくれ更なるとし　松 大和のはくさとし
おさし　末三君大和の友女なり
姫君の借をき中のまにくまて　家れる人仰せあるし何のさの
必 男し出し　まへ来様なれと見ん大かなり
まてさよの人へよ仰せて　そこより舞恵の成るとうけく初ゝ文ゝ有
必 よの人の御すとハ舞の事れたしも此の日さしとハ遊す打様なるなむ
日 樋手書の事よりいまるを家なれハはせて見んうつさんなし
そうしこさ於いまるすゝしらくしらかり
こさるれまくなりん人へを　ムつうく陣きなりん人ハ今と陣くふへ
まさすあいはあかりをと少方也うすと舞恵の花ふ也し
必 寒さ次第きとへを　携愚しうさきよしなり
よし作の比しゝハ　おんの人すてねハそれもかくそよいろう人へとハ返

おさなき人々とも　男女君達此後まて宰相中納言　此時十八才とあり
次郎君 此時八才とある 右大弁上 きさきたちしれ給ひし姫君　宰相中
殿て負此少将なる又後紅梅の大臣は少将よなりのちは此君宰相中
納言よりあひなりけるへし
かれまさなしらんとまふふくもおさなきけれと
少　今はもれさるけれとも いまさしき旅のやうなねとなり
姫君はみまし声来程のこのれなりけり
みかすまり
鬚黒の本より文へおりかりかりかし
ぬいかんしまつくとおもし
何となく時に後への今たしかくかりのよふかすもおもし
私　大殿の少将は人なり
花　是は式部卿の詞　少　宮の御し
秘　大殿の人は今更なきまてそるきし年比うれ給つとし少将は
生まれつくもあれとこのくさん給つさし
いと気の毒き　少　少将はおしきると大殿のやよ源氏とし尚侍は
いさあやのふてとりけなり
私てとりけしといふ所の地なり　秘　文の返事のうし　奥

花　是は鬚黒大臣の詞
いとまうし志つきん侍り給つ
私　大殿の詞　少
おとなしきつましきへも侍れはをのとまよむとひ
秘　のこと申すいの御事ありし　此子達数々ありけれし
やしすくそを　大殿の御とよ此の下にて又此給ふかくねし
今はさなかくりに　又大殿の御まてさへくのいつ詞し
つとさり承りしよの人まてをいせくいさをやうにしとて尚侍の
異　大殿の御くとさねやうに源氏してとして
必　今ちと懐思なるてまれは事まて御涼らし宮此めて大殿のよう
とさらねやうに源氏し給くへまをてをいせてこそを退すと
定めのまへきるすとし
同　おまりきてまぬといひまつらひておすなへ智恵をほすてらると
まて答してそへ大殿の御ふし
姫君とさる　私　まきのもしられ宮よみせしへし
男君たちをなさいま上ますふ　花　抜て宰中納言とうへし
つきの君八八くわりまく　花　後て左大弁と見へけり

姫君ゆゑおぼしくれて　槙柱の上をいふ
兼 春宮の姫君は少し姉君にてと云説も姉とはいはさるなし
おこなひとゞけたまふを　日 章子　日本紀 我子　阿子
兼 少将のふみなり
なかにもいとしきの君にてやせたる人と　式部卿宮へ面目なき
うしろめたきのさはるなり
風おこりて心めくひ侍るを　宮もこれ風おこりて大将ますます
雲さきなりいひめくいたくつゝみつ
けしきにて　あはれしたなき事と云説したかくよりゆめ思し
この君たちとは車にのせく　こゝ君二人の事
兼 一本ま君達を
六条殿はいえるくおとゝは　六条院の姫君のおもとは
とつきくいえゆきまいる心は梅壺の后をはさ二人を思ひさりけは
将とおほえに帆を
こゝにあれ　六条の説し
うちすゝめていとんかをけはこゆくしく　二人の君たちとは事り

宮はそちかたまて梅壺は年ごろしなよくおはしなを見むとしつらる
神しめ君も院も大殿はやすらかなると初きん人のん申しかれ長
わすれくれぬ　梅壺のみ申し
女君のたゞ日の　玉鬘のこと
ひがくしきたゞ日の　木の少方の事
とりけとなくさめ　玉鬘のとつきよそ紙のをそれなれ姫君の
うちとんくおくつきすとれ　梅壺は少方へつきまいる人は安まし
ものゝさま君たちの事のくさとそうまれたなり
ちまくあかしらひまりまくつくめかなり　兼 式部の大臣は文大臣
まくあかしひきひまくそしもれも志のこれし後まいまくよん
おはりにもなたくりて初のまひりまてつきてこ後は志め居るまし
宮まいいそし　式部卿宮
春の上と　おなし宮上し
宮上も此宮をそれおすめて大少方の事くうしまかにちかまそり
なかくこれ君　蔵し
うちきてをまり　と雑筆かまうさといかにしぬ

よろしき人ひとつにをもあらね　　実父よりもなかれし
内よりも仰ありき　内裏よりまゐりて入内あるべきをおいおいとのたまはし
ありなん事なりとも思し
　蛍兵部卿宮にも心ありしはつかしくなり　　同 遠慮
さいつころよりかくり　　蛍兵部卿は文の心もかよはしたまひけれんをちかいて
御心と見えたりされは源氏の御謀略あるべきを中々いまけとし
そのつらんのおほひは志のふるもしくはさへまとかくれぬるきぬかれても忘
志くありのみきつきもなしとすんなり御かたとのあるを
　抄 真実なきすいは御かうへかうくれなくさしとなり
　私 蛍兵部卿にも家謀略ありすすと守ふかきまてしいうれもなかきすい
御かたは志て御かたにこれはさるのと雅意なきにおのつからくまさる自然
　によろしくしとこそんれ
式 罷もなうしといへのかはいうれるさまうれは家一人の不例ふくあらね
を寄よいとうねし実父を人それりしはうしと蛍子は式しんて家
かもかい御あ付て源のとかへおもしろし　　まつて殿よ家も記れるをもとくるし
かの御中とを心ささとききに

らうたくふかき御舞皇子おかしうとみへておりますつさ思し
これ筆のみえんと　　抄 内侍のかみこれはあまたひかよ筆をおのつまかす
さ御そけまへつらくと　　大将の北の方なとなりなんはかは中を忘るゝ
うちかたえかなえく　　同 大納言くは忘れたり
　私 たかあく人めいは忘れんのこと建議かなとし
人ともおもろのいへ　　源氏実父内大臣なりとも宜りかねうとまろもおんと也
おもやけへのとかのことさくへいかなくやいおもとし
右大臣老成家　尚侍 厳子中御座長寿女　　同 尚侍 磨女
右大臣民宗家
　私 尚侍は職掌なかりし御前院書家ありの例いおかしきし
らうかりてまいりしも　　抄 源氏卅八の年也 矣
　同 西宮記尚侍新任之後後宮陣令奏慶賀之由 侍司車辺之惟 任女下仕候不
内侍一人出来侍奏 書司一人相 給禄女装束一領 司女左束帯 入斎佐芸 中宮院門者付内
侍令啓其旨女贈物 今案内侍のそのかみのつかさひかにはぬけその
陣まて参り内侍一人出るゝ手由と奏すめれは則女房
の装束を給りて退出すけれは此御法のまうでにて家々へやりて
内はこま志のつへきつくてきかさんの気にしかれかりてとれ流

かのかしこうしよくし見えけり　季

おとこたちのあそびなれとも　抄 見ならへる男踏歌これにつき此巻あり

ふしぎおもしろからこれにたる　抄 源氏と内大臣とし 此大臣は舞の君也

宰相中将給へりけるを

せうとのきんたち　抄 夕霧なり

承香殿のとうくうわかみて　抄 柏木なるべし

さしつぎにありあるし　此承香殿の父は紹に仁寿殿あり其

かに家の女御　異 舞の君は此承香殿の母のはらから也

は 此泉院女御式部卿宮女也 母は木槇に内大臣

必 前代の女御式部卿宮の中の女也

異 承香殿はかくて東西のすなはち舞の君のいもうとの女御は

のぼりたまひたりし　私云 舞の君のいもうとは承香殿の女御は

此時春宮の母后朱雀院女御也 此時は承香殿に住給へし 二の宮

かくやうにもあれはかはりてめへし 此宮の女御は式部卿の女也 前代冷

泉院女御舞の君のもとの少将と一後のいもうとし此承香殿は承香殿

のやうのようへさて西の方の后ふおはしけれはこれを御心のうちは

たかうすみへらうと云なりへし

御心のうち　抄 玉かつらとは云と句の例くみくまして言はへたり

おしてかりていかゞ

見えかゝりつしき家の衣しから　抄 前代は家の衣なと云うて皆中家女御

あるていかゞりつけし給へしとし

私云見えかゝりつしきとはいひしてもなかゝき家の衣なとなりとし

中宮は弘徽殿　抄 中宮は秋好也 弘徽殿は内大臣女也

此家の女御は式部卿宮女也 麗景殿は左大臣の孫也

左の大殿の女御なと　交 後の左大臣の女御也

抄 今年より此左大臣の孫春宮へまいりてえらし給へて

系図云　抄 左大臣　女御

今年より東宮にまいりて冷泉院御位の時此女御の左大臣は

中務宮宰相の君をおほ婿にほしけり　抄 此宮へ系図にの見え

思へやりつゝなにしに　よつの里なとふつれまさる姫女房とりて

御身よりおもへと思て あまつとしへなり

まうなれ女郎といふよまやうよ　奥 なやうハなめうる羽し
秘 朱雀院の女御舞楽の妹まうなの女御し　奥
なハまうさりく
わのゆくんし
秘 まうなしいまとまうくおかしませとて女郎ハあひ
私云まうなれ女郎ハ承香殿しされハあるり　承香
後太后の妹れゆうりまて在りつれ御局とそしうりと候ふよ
己つり但此女房ハ承香殿といふおよいうつぬ今ハまうなあ
御局よ此とおりしてまうなの女郎ともしゆし西よつ宮れ女
後ともうハ或ハ宮れ女御承香殿れ西おりてよ品とハ候ぬし
其東西よまうりれ御局あれハこそあさいうてうりれ面てそて有るよ
ハ此の門ハそうりよ西てとちて帰ともとさてれところ此式の続れ
御簾中宮の御うさ　御門乃御かし　中宮ハ秘好し
朱雀院　院のこうとし
六条院よハ此まうひハ前をしとたるうさ
奥 有りつうこうろ　秘 有略し　何 たうつきいうつうらし
私有 有署まうし
竹川　踏歌よりうる曲し竹川まうよあり
うられたよの　君ちハ四五人　内大臣の息四五人ハおかまて

まうハなり　八宮君ハむかいたてゆく
奥 内大臣の息れうしむむかいる南殿といふ南時宴よおよるし太鼓の乃や
秘 むかいそうい南殿よいつり　是も内大臣息し
秘 奴仕のおうハれ末よし　母いうしと朱小門しきし
太郎あいた郎君と　私まうつれ待子し
秘 まふよ十つりおく夜上をうしよまそんなり
秘 舞楽の太郎れ嫡子母ハ或ハてまの内女上よ　十八つりなる書君を
とりつのなり
まそ人をそ兄候とをい　秘 むかいつるそ今つれとし
内大臣の八郎君ハまつりつれ中し舞楽の太郎君ハ南てよなれし
面んてうのくましらひゆれよる　内大臣まうひうて女郎達の
御方よも帰さうさまとむかいつれ袖とわゆるくいつし
このあうかり　秘 まつつれたつおのかすり
出かしこと女房とりともやうかうちもとうして恵りしいとくい
奥 出かしろとも女房達とゆうしことも　いかて用もんとし
秘 さうしことハまうつれまし　やつにうりすうして心をゆるへきす

もろもろの点者とおりふし
秋 むかしもさる俳人ありしはけふよりすこしてさくべき
と称しくおのれなり
あるしてとし川をうつし
このころはいつもまや
きりいまさりてちく人きうらへく
は 人けさりしなしそしとをふ見て
うきうきうたあらしなしれこしもちくらう
は 水澤むかしは此てくまりを俳とうらうし
必 ちう肝まさとくりへふし
新 むかしは此方よりは水澤なくべきまや
日 同言むかしは此門
俗のさまにても俳の行きうらうしる両俗の方をも返う
うゝまや京の句に流は家ハ不やしふしきまうをき
静故法をきん一物其男諸芳雅集のすゑ仮さうもん
うやうは御陪ハおくりく例をまうしみ兄京ゝやにまきもり
両俗れゝ人をちのまもあらて雅集をくまうすをはるよ
これらあみよるのはく
必 ちねの旋頭てし

むかし無何の部よおかつうすくおのひく舞喜も柿帚一のさうの前
ありきつうつくなり
おかしうつらんたとえつへ今さん向をうしひとれしかおかしきと
必 むかし人中のうつ むかし此舞喜をきらしひのふおそよ此まで門
ゆるゝをこきを追りくきて行ておゆさくとふんなり
これうなし むかしはうくてうあかひのちねとし
さらに俳人てそ 秋 あらうようり俳をすよし
おとこれんあいくちきあらそみえて ど おもしは在舎しんおわうし答
は諸前れきれましん今はくまさくなれ任志つまれゆうされなく
まうそのみへきけすしうりとちねはつうしとうかのをうさし
秋を為れ家候まうおもくは源氏し宮まくむかし了れ集内を
言ハ兄りと唯集ぶんれまもさもたかをいううさうかをひよひく
はいつ面ゆうされて匠白あれと源まにしと人下にし 笑
あまうすらくちうやと 白達
いとつくしと 人ぶ中 梅と舞のつくさうて
さりうみぐしぬと 秋 ちねの人と

さしもさやうの事は定まりつるわたりと大将の君歎し
さもんまうるりね世のうちと　せりつらし背き人をもこてさや人々に物わたる事いささかもん哉　不及此哥也
うらなけきく　舞姫の歌也
玄旨にて　　花散里
御方の住わたりひ　　めでたの歌也　　[illegible]の様をして
はゆうれは　　めでたの御局也
読んしあまりて　　又　玄旨は人々をもみせまふし
ためはいつきさればいとしもておかしう　　左衛門也
は　左右衛門の曹司なり　西の方也　宮内太后御右衛門尉
曹司也一名大宮左宜陽殿東庇左大将宮ハ左宜陽門内廊
右大将宮所在陽明門南廊左右中将宮ハ左宜秋門東西
私あはさのみすぐわかるわれくといひて日本みえし
紅れよりとく　玄　玄旨にはみせるた事の方よりしてつれ
ど　玄旨の御消息し

秋　大将の方よりちかう都にてみんかふし
ちぶくまんまふ　　またのれ此みゆと見んまいらくしるまふ注し
源山木より経うつりしうつる事又なくたちまさりてもとわたらる
玄　大将のちからたりつ注をは山木とかへり
秋　参る事ハ大将をも云大将はちかきひくいまし[illegible]
は　源山木は舞姫大将をかへむとし　玄葉集は此中将を源氏の
中将は立すらぬくいおのかきりにはやすきといふ事もむつ
つかれ内侍はかしらく源山木とふ玄旨て是のたねはれるし
安　源山木とよあつハ大将の唐名を大樹ともいふ也しく此歌不審
私云又方くハ歌二首之説もあつくと云し
さん侍りなくも見てせらうまかく
は古　百子内さへ侍りましは物もしたたまれても[illegible]うつりゆく
ど　家のうつりといふにまに玄旨にて家うつりにまつり
美　百子内の事の述懐のみしらるるとみえうつるるい
必　きしかうさん侍り[illegible]し　此歌れ人わたり
おりてあらのくむ　むろつれ注し源山木より[illegible]うつりしかすと

若んてこゑはおとしてのあつかひとゝいつしくおほゆるなとおほし
人にこゝろせのまへ　うしに冷泉にまうりてはつかはしへとこゝろせのまへ
異 同十一月侍りける此后のまへに帝のおほし枝経書にもまうしひらうなるにや文
例あらん一義といふれのれいとへし行ふまきは御ものもとし左て哀上人
必 女房はたしも御供あらすし今は世にもし兼行内侍の后へ参ぬまうく
此事にと思彼しまつゆのまへとゝこゝろせのまへとしや、おりうし
なとこらいふみしかしきうしにくゝかたくれおとしれ行をもひよ
は きりのよいゝ人のもろこしとうしとをとりてあるうちにおひはしひよ
いきのまへうしに日本紀に形勢と書くをいひと読てもちてちた
如 冷のおほん化にふさはしくにくさあるに源氏はおとく小あらて
この給なしとくすり
この院人へいまにおりしもありと
なるをとを見くてまうてまうり　異 源氏のてくてそ入きいへ
異 源のんなり
かめりけんたへい
も 源氏の御事をまつりのへりおゆひのふ事なり
必 これといふ源し源は西いおやれとはまうりねそまうてとしとし

こよしといなきつうしと　此ことし人もつくへもこれたゞりんてとはあさそ
とおうかへやゝなり
いとなかりけるにそうしあれはめらひう
川なくんなのはなひきすかうしくはれは血はひろなり　大方つくへにあたりつく
おりておかんこよあく　むかしれかりたちまきんと
かいとゝりくかくして　おうくうれ御し
おやしちおおうつかなき　如 御定なり
よろしくひなとをおりひまう　は 位之位加階ん
如 むかしそ位は叙さるうまはれそ　異 武勢位之位のやす
も 内侍のかそれ并かくの事し
和公家任の労もなくかゝ階しあるうとそれの義候まう
まいゝまゝのいねを曲にれとそをいう所くせなりもひと
異 一本世くせへおきもまうつれつきなくえうとれいへそうとも
めくとうしみまふ
必 むかしくれくせとなり　御子位まししてれまうしもの御
ととやられとしうすべし口ととく目のうとし

うた上院泉

あかくてかくるいかひゞきさきむつかしきをとりかへうへたかりひゞきおもしろきん

河 日方 むつかしきはちいさきをもて楼辺の所そのちまたにあひしらやうれ

按摩 ならはかしかたそめくる右のおもてはつかひさきをもてかたをうつ 失なし 東成

利音 むつかしきのあまりはあしねしらうてたくみかすかへつる 延喜御製

花 絃有楽式ニ深其設一丈其葦丸竹一頭二石阜一尺其葦六竹頭

其石八年 今案其ハあくにくく深くかしるてたるひかなるをかへり

林 あさき寄りといふんにうしはすハ一頭を合する物し下んハ三位に叙しれ なる

私云 川とるハ漢ハ一頭をれもてし 清抄ま是つうハ考へし 但其

の多ねにロハし是又延喜の名夜周子に寄つかれたるしる川へし

ころなつかしきこやかしきまや 如らてきかきかる そこし

実 わらゝなうをつかしきまやしらたれは絹し川うまてもなきん中ん

いとわろくきこゆるに うた上 冷泉の院さ宮し

名うひのかる所やいある 花 源氏君はれかとさくるらうしれ侍る

人とよろかなそく思するとしのうへし

此 六条院にかまる所もし候さ侍るハ候てえしくかまるを

かへりなり

果 源氏にうまれなかひ琵琶ねにしりむつかしれたれてそうしまとお

もひよろくてれいにんやかへりうり

此 なつくへのしうちもなくてそうしそうなけるふくるまや

為のうへ 此 はなれ源くを嫁にそ晴り言し

此 いかのゆん気しも思うねむしらは事をところしてそそんハいへせきれ

あさ琵琶もろくて琵を見ましに

を 三位よりいはあの名かを用ゐたる加階のうちとよかるかへし 表 三位のうちをまうか

此 小しててとハみる人対しなりてそろうへんを述うるし

いまりすんむる琵へあるくまさと むくへれ初

此 向後そて一段と言ふやんかれとかなり

うつさうて みうらし

あれいまゝり

舞楽の物にかるのまゝつかしをかなり 如 相定し いまゝるいまるありてと曲をましきさし

私云くまゝつきんヘとハ舞楽のうなんてむすかしけなりくる

さんよれなるあ所よいろ程のまかてと舞のなるハあるまゝしきし

きよれてとりりをさ文をとはらりきんかん

うきよの人きん人わかいかといりきりゆめりしくよん
必 はすやとや知る人はきりせられさきよう
美 人はは、まえ人をとそりせてやとし　松 云はすすと申ふて
なうん人わかい今よりおもきゆんとおのかといゆくといひせてきた
面のやうまきつらりしまれも　アノ、と冷のまう実まうつとゆすかさ面
おわ人まちひかりくれいむろうも実ふしてくおいかれうちわ
しれかねやうに用そうしうかなうへし
いとうきれしも　おりつれんて
かりしろつきさ面　まうつれかやいろするさ面とかん人まきしと
もうつしきゆ世のくせ　せ人のんれくやれもうつしきとし
松 もうつしくらうともの子のすいまんうと浮氏も月しかうれた
うやうにまうつれそうのうくといふうれ
面うこそいめうれめ　六門のたんて
そねいうくまうくせ　帝れもうくせまくると舞男のんりとすうやうて
松 まとにもにかりしめ候
よろりんのまかれせ　同 云 同

いそき面といしまつ　松 退出のまくといそき まかて
松 云 いそきまうさめしかとい分併の弟し紺りふいゆくとそてあいて
面とふきそといふ教なうへし
美 ころりしとふもとすい　必 はん人かう子家系と叶宜まうひていそし
じしらねるとも おぼ来の人きんまうつけんていしてこゝ
松 云 まうつけんし帝のはんかうていやうれすと　お見ていとふ
うつ門もとちもれともうす退 おしくきん お身も 秘しき 保まつ
面そてさせ 後人まきさ面　是よりいまうつれ退出すへきさ面とさ面
二 舞男のいうまへとのいかい
父おもしなり　松 門太夫し
門太夫なりしう中今うく退出するへきもうとうきうらまうつて
さしい物くうり　松 動定し
そ久しくお揃面あいか年届来門まとねさかそまうくきその事を
気もしいくしゆもくね人かとてとい舞男とんらずからて候まらゝと
人もう何きたにすまゆし　松 動法し　まうつにのりけすひりすまし
そましきちうまうつて　舞男のんをとてかうかすと候まらく

後撰云大納言国経朝臣の家に侍ける
女に平貞文いと忍ひてかたらひ侍りて行末まてちきり侍ける
比此女俄に贈太政大臣にむかへられてわたり侍りて文たに
もかよはす成にけれは女の子の五つはかりなるか本院
の西の対にあそひありきけるをよひよせて母に見せ奉れ
とてかひなに書付侍ける　平貞文
むかしせし我かねことのかなしきはいかにちきりしなこりなるらん
返し
うつゝにて誰契りけんさためなき夢路にまよふ我は我かは
必 おさなくもこの段へきかなとし平貞文か心に悔まよへり
哭 平貞文むかしせし我かねことし
むかしちきりしなこりなるらん [illegible]
をもしろき所の人をさそひて [illegible]
[illegible] 今 [illegible]
[illegible]
[illegible]

く退かさせまつりし
かくもきのふて　懐ナツクルし　前にやしなひそたてし日比にて
かきしきけなりふ　なきにかしきぬれねと身まかりぬれ共心に思ふ
これは家をかこふ物とておもひよる　妻 帝のみかとと云
必 帝上の御心て秘ノ内にこ宮ノ御し
哭 まかりなんし　秘云見えたれ共これは心にかなへて契りける
先退かれとさせのふかとまかりぬれはまさきけりて [illegible]
家人の内には連て小家へけかねへまて [illegible]
さしとそらみのかたわとて [illegible]
かられんと [illegible] 帝は [illegible]
おもかれして [illegible]
ひかりなき女の [illegible]
まゐる杯に文見と事て若の貞文か女の [illegible] 貞
文ともかく契りて後の [illegible] これは
無実の [illegible] 帝の [illegible]
まします [illegible] 帝

ほおりつけしをいうてやさ候いて
ありくきよせく
必 門徒わかきを退出し 奏
旧 西宮紀公輩親王大臣中宮宮人以下恩女親王女院尚侍典侍入
作開門吉上を
きかさらすされ
如 源内大臣の人数し
えおつしまつされ　おもて退出の時ふと帝還幸なり
奏 御輦大臣よりまいり
かりいときりしきちう見まいらせて
旧 人参内大臣御へまいらせく作りまいらせいと奥かり
如 御輦大臣をなつおもしろきうれし御なり
三上総
九重かりてうかくてい精のたてかくかうかりて見かりひらしとや
必 只今退出わりてい雲の上つかへまうしまゐらし
秘麗つそつとい舞そのうすを候つてやまきりしく帰りつてい之経の
表門をすて別女うとしかうかい来くれかう只そうらくらうへさうなり
てとなるちかてちかきてしかれを　かたらかりしもかねを弟子の陪る出り
北宮りいひら扇子のれてしちやされて主付いてとうれらくをいまかめし
必 尚侍のへぬし
せくとかつうしくあるひ門へき
旧 其の外もますされつかかとうしされて御ゆをかくうしとく一夜経すれか
必 旧寄をとむそう　まうつれんい一夜のならうすといあらせちへきうるとし
義公をきさ此内納しさきさちけあつしと云ようもろつれんかの不審し
秘公是い帝此内納九一夜すといあうしもさすうへきすさとし
おしもへあるへもと　如 もあもしされてもとうらしとし
む ちおつ日をいうしいうくいつかかうへまいおかしかりやもい浅門かりかへよ
今よういいうくかやかへきとおかしなやむと見ちかれて尚侍の舞
とそう侍るし　秘公帝此内男舞をま子かなくされて又をいうとし
をと男をつらてときしもとされつむとと云約まよ作うし時養の舞ん
必 いうくの少ゆへき　今り来いかうかうにくい作るよいまへきるさ
おかすしいかりしてくいすいもまひ語りんとおほしとかり
いときしきけおりしと見てもすう　見しよれあかりかやめうさ偏と
む 舞のへんきつくうらきけおりしとわもあし
西 むかう
きたくうい風きも浅くうよものええて台ちうつゆへき候ふいなくそうと
必 まうつれきうし高いうらしまり足よ見つ風いてそ給さとりかい畑もかいまとし

立ふるまひきよくとき白はなくしても風の面白くつくりなしてはおもし
ろきことにてあるへしいふくはかなへきてもちそてゆくにてある
をよくきれねをえひ　おもての見しふみとおもしろくおもしろき
ところみえかなして　みとゝ還本のさたし
やすくこそひかれおもふて　内裏より出くに見世舞上手人おもふ
とまうれてしまう
口伝にはゆるされてをもしうきまゝなり　惣てかやうの事は海には口
大臣も同心とをもしきことちらく内なるたちかけて候まと申
いとみちの風の　見ちかん同すん
おもしろくよ　大つとなうやうかさるんかなり
又おもくにてよろのうを　を抜仕おく
きのしきかきやうよやと　候よさうの儀式もかきをむきなく
おもしろされともえおもしにかなうるうと今ひさるよましてい
ゆるしてあるかしてたれをもさとらいのまて
さんとまやうさまし
りとしりきることいなしぬ　口　不進退　総　源の方んをきめのすみおく

又口大臣のまへにいるかねをきしされはしとせくとりとし存ぶを達し
ていやしへうしんとの義なり
六条殿いつとゆくうすしかいおもしと　源は折りしてられぬ洗心おれた
此舞をよくよ舞手の道すのをと一段おいろくかけせとしさをしの流
うときなるへし
女す志かやくくみり　口　おもしろねうをいうなり
口　波ち式海士九志かやくうつ風といふとねすつねうたぬるいまたなる
必　ふかねうこなうひくんとりき波方の海士九し
或佛説舞まひと五かねうてとりのんよ志かやかやうつといくるまや
めとてとりていきみるりまし　と　更　たかのんて
必　たかのんと　義云むかうのれんと　私云只たかの名ふ人をめをと
ゆるらん流してんの打ちみてくらとりふ郷と見てくらり
かのいうかさせ治まりしてくと　也　佛門の法すなり
みなれ　冷　むかうのれつあつねかわして　禄へしきと舞まいの渡
ええしなさしのま御しなくともうのれいよくとうなきちて
んとけきてめやしれとあしくみてのまかと

みえ家し毎　　　必　弐アマ家し　其を
御らしてたゞう　　　弐ム家れらしやハ舞星のよりもつねやうに
あへきひしことゞ玄りされとりきらへ上つれ雅ハ玄玄見う無とし
身おりふすくるひめる　　　　　於　むゞつれすし
けしれ方方かしれゞすハ舞星れ玄うもおほつれもろうと切そけし
づきたのとけをいまてくらしもうとし
大とのハ　　　源氏の君と
まそうも一つ連すさみきなりやいとかうきさつく志うとぞいてまかめきま
ら雅さお仰んとろく　　　　必　身ゞるのられハ身ハうまそうるとしさいく
志くハ物まきふを身くさるし源れ清んやハうまし人をもんしとを
志くれむろうのうすを花とらま玄らて色しハにかいうすくなりめる
るそとくやしく玄しくかわれなり
もく世すとハ今まのをこうるしねすかれと　　　うやにまりて当世な
なまさまりらる事　なうく源つけるりんのとうなりふより気りゝ
物と思うて形かうるくなり
たいのかしやう－思らハかるゝきてすけ　　　必　たのハ其とく源て知し

さりうさぬるきなり
てるけ身ハうれすを　　　　　たるのころうく処てやりぬゝる孔て
ねき人なりあす●身ハう連う身しき多すしもえをくう治つゑと
身ハうう清くれらやうをうれ　　　余う見面れ所う歩ろて成る人がう
てつまくゝともすくさすしてとをぞひおくうへとおくうまてゝて
かりハ志りんてくと　　　　　方をうまみひく所くつしのすのさへ名まう人の
円をさうらうくいらうくとはすもえうれつけのすハねとし
身くあすハせてと　　　んやまうてまやそるすとてもとうれのうふなり
うれさまつくれとけきられの去面まゆりさる人とハうつし　のうつや
其　源氏のすさと忍うハ仰やとし
必　さりとも源をとハ思ひのうへまでとし
松島のハあてハし古らへとハ源の家男をさしてよそまうるし乃
すゑて心やとハ源をとハ思うのや久志のハれやいうまといろうのハ源身し
泊連くまろへくとうらめしう　　　　源の久れ詞し
一連くゝ●ゐりよれされて一しか為つしさのまきうくすと玄らし
思もつれくまうへくすその事ま玄しさとこめくいそう

いそつはのかへるらん　必　いけのはのかへるらんとあり
むかしに思ひくらんもとそまうれい　深のみをたねのかうもねひゆ
まなくつへ本をつゝむもまるなり
しらなきく　むくつれ体なり
積つるもしよ衣ちんゆそ　むくつれんまし　深のまさ白ハ忘しく
おもひつくらうとなり
まかれの忘しやいうくのんちまんなといえめねいねおやまて
深いものかやのふかく実文なる積ハ忘しやいうくのんちまんなへ
えのねいねるかり
もまいつくふあいうもあかんと　深の身よいさくうきこゑへうらんと
まうまよりそしくむれとふかなり
とれくもつしかし　深のたつ実す此めうし
わの人へ心もうせ段いね　秘　本とし
本をいかのせしきまもついさうくうまるらんとい
右近ハ源の析くゝくれゆつひゝもしきそゝし前し
異　本とも実否をまうしあるらし

おかつるゝや　いゝくく　たゝすへうやうきれたといふ不審ありんと旅をなしなと
なうしめさう形此まりに神かまてくさうんへもとゝのとれうゆへや
未心　ウタカタ　日本紀　遊仙窟　宍多利多
なうれくまあてゝもしれまうこうへしきうとゝるうら
わまさう白ひくすわう家うさうもひのとき
覚てきさすゝ山吹さうえて君をまうれねてくゝちうかんや
後撰　忘はみとくぬきうらくのれあいのうさ平さんへまありて
定家の続古今くらとハ古今の宰相とつくる時の心のたみもひ
よりすうさかくていゝみてかゝらいかしゝしとれをけう二とそてう
きぬうへとゝふらしにうさうさんへと云ゆまつてきそてゆると云
続いはくとんふてもつうかれよの人居の続し只四々子此初し此所続よ
とあるうしてといやくもうれなしのへうとよといふ
あう詞すゆうきたくへといひんゑうかなう人しや上係皇枝に
此続古今うさといふそていゆんのれをのありるさ古今人へうし
一続古今とめるまんへし又ゆうしりと云んし水皇抄
新古今　忘はうとあと段のきもしうつ読へ理り候新集うさまなし　銀抄

此道祖師歟也尤足開悉　其僻案抄之義挙之
万ちられぬひてらしろつ来し歟時し　常縁東鳴山吹し尤皆此
うしろこのまるくし河海たしらはもは皆此の人なり
松会此なんハいくけすらりゑ文字ハ書るよう用なしうこハ
筆とい字此んなしくけくり字人とハいさかや人を思ふ
ねとな（蔵）哀しらこふさ　信　ほ　得ハ見ろし人皆此の中てたけ人
きえ志りしとらんし　せ　志りし皆此の中すいをし此若
もへるたのいきうかやといふ義ん

雅のうち此ハしなるつれく　やうなる折あしハ物語して（つ）まて
くも傍さうとなり　けうま不及之
はるん思てかくのうちやの紀まうしにハおもてをなしれ名てたまう
いやしるくつ紀身し　白　泰　ナヤくも　尚書こ　礼　日　日本紀らくやまふんあり
秋　教字こ
ひき乞ろけくむるれつかうてやすす
は　日やまね形此むる数志う（の）ゑしきうれまさらしらつれ

松　き行（い）秋来せきとしら当のうこかれもおもしんあつく傍う
形此宗此とるうふろ歟れハおもしろきしれさ日し
歌こハ川名生秋こハ川三の此ささまし
人を見んをらこて思さへし　須の歟あり人此見んらおハいくとかとを
れむしれりんの君　松　勝月夜しす世のすも云ひおさて欲月
欲も内侍のうとをもつてを内侍のりくし富世いりてなり
奥雀院の后此　後徽席大后奥雀院の母后し
さしおうりしろうろすれハ　以　先此まおそうするれハ見ハ勝る紀
以　勝月夜のすハ芳ふなりむろこれすハさしおそうろう北云ひんし
を　今むろうれすハ此まおそうまりて歌るしとおりう　字
よつずまておうれかりらる　よにもおうましきるれ夜うら
云つるんつあまさ正まおる初し
とい（き）うへいんうやをうらまします　須の家との（ご）とおさむろきへく
れてしいろうきにをいさせんふ（い）若夜すいうのかしと候ちまし
今ハ昨をつまてらハ　女　肩分ハ振ハ何すおうわとろう（へ）まとし
わをなき恋の信日なりやし　をまうつれ恋しま状あるて
さましまひ　松　あるさ夜左し

たてとゝきあらし　　源の川すみて
なつしうゑきなし　　まくら照りし行人やあると
あつまれをとゝ人をもとゝろきそてもおもかうそて
阿　辛志多加戸加毛佐戸支井留波良乃伊介乃世多万毛波万
　　祢奈加利曽於比毛次加祢世万祢奈加利曽世　風俗上野部
弄　和琴五柏子よいゑそうし伝を柏子々いふこゝかきなと云すそと
玉藻の与ひえんまうむそろゝをとらふる伊しうれこのまつのよ
よわうるなり　　　多風俗上形ちしけふようつれ子のるすそ行伊急し
必　まいなうつを叶ゑすふとうれわしうおす富しんわうへし
　　なうに来まわうへ何ゑ
んかはいとゑうさそうれて又必きそへきんへを発めゝも安楽し　抜漢杜
詩伝柏師和　陸士辛鬼魔　注視桃如鬼戯　水魔ともそ告うろくきれ　是をなし　歎入之哉後漢
杜詩伝陛下記兵十有三年持し御読すて　抜漢書范魔鋭院をは
やうにゑきもれうゝて鬼と玉藻の為らふちきさう　うらはさん　とかりう
ゐしきんへまんせゝゝい　　源のいゝと比拝を玉うゝてあんれつなき
とゐるのへきうとりのそこうるし　源の去夜なうるへし
わうたれゑきいつしうそこ
まきをしようなりとこれ川いわしすきさを　　今一首不載とし
知　川河河ゝ月こ　退むの伊をとこ道路いさるし
れてとくさ　帝れあうしゝあれ川の与つ日れてとくきゆし　ぬくかうさきこしの
沙みいまのひくよ　　見うと比ようるうくへの伊又なり
为とうきぬよ　　まつくへれうゝむうゝれなとしされとそうよ
　紅舞よのするつきゝるとうきゝまるそうてくる見えうよいしなをし
んか伊のしうゝるやいく風際の局しくさうしうゝれうすなとんへかおね
　　　とし
狂うれわうゝこ所りし　　　　　　　　　　　如　源し
弄　源氏の伊んをそうゝし　　　　紀かれさて見えすのゝことくらいくこれかとし
まいうろういあうゝと　　　　　　まうゝてれるると源のありひあるし
去れ伊まへをとうゝもうて　　　　如　西のさうへもとうゝまうて
呉竹のませよかさとまらう咲うゝり　　　必　山吹れ事おうし詠し
くまよあうゝもへをかくして
河　万　うさ見ん　なうゝまゝ衣まてなりゝのまゝとゝをの書いよに常ならなくよ
六帖　くらかゝしのくまよ衣を俟しまゝいもてんゝよゐくとして　わうへ
如　河海ゝ川むらの内六帖ノ哥出付る　　又續古今に讀人不知

とかくも衣ふとくいはずして山吹のかはり衣と云を波くしてきかん
此衣可必々もちゐるとは山吹ににしるましきに異に後古今此
衣をも宗旨と定む古帖の衣を引て
おもふ事井手の中みちつて聞もいはてくちなし山吹の花
むかしをこれかし依まらぬくちなしといふ源の兼てやらは
何かしこさ山もさやうにのまのへきかくもあるは山吹の名
にのつかていはてそこそふかき後のみえ中にはむかしを此中し
顕抄に義なし　旧　中院
旧　万　山吹をやとにうつしいたるにこかはいやまれ思しくてきまされ
後撰　あふきなうにそ底れつましくとはかりやゝくれ山吹のゑ　千載六ニ
たゝむかし此上のかこうするかつら山吹のもにうつるまく庭
何しし所たえしくうむつつ此名くれさらぬくるつう
なくわつき山吹の何そなつと此是うふるさそへ此ふ此しうたる
都かなるも山吹乃何ま乱まてる何かうに家うくまうなてなく
しうは只今も源氏名の住ま人ゑうらむきくしするにわらうて
此毛をもりておもひおもひおもすやすや

かはるへしくいはてに引く
旧　万六帖
いまねるとつうしかちよくかあし此名めにやみるし山吹乃花
水原抄云肥後ニ静ニ説云人飲日云の山吹此名の名にみえてこゝ
よろくられこうくれ　業之肥山吹之名まと本云人々集云
名さらは歌多まありてみのかはりになりて川くまつれるは
如　おもけるに見えゆうし引云名さらは歌人に鳴し　夫日
私此山所に射して毛うつ此雨けるにみえてまされぬと見へし
海原でまうつを山吹もあくらるゝをうまう面白し
或彰宮源信抄には古今なとて此ゆゑにはおもる只とみるは山吹の毛此
うかはにみえてつてといへるを　更衣葉形人ゆかしや万葉八
ゑめの書に此歌人のかはなるにおもりけるにみえてはいうも何らは何の毛
此哥は家持か坂上大嬢につかはせる哥とえは叶ふるそ何ゆゑ本云の
心すとなくてもなくては只山吹の名にみえてつていはなまりて
此云は秋の毛をとつる云し春日に山吹に引らつくいへる何ゝきは
面白しても何しもかもみゑてい書毛とともう何とう此経り
くりしくみえてこそう

く御覧ぜられて奉りしうつことハ　を　むかし見し君にまされて後世あかし

奥　源氏の人々といふむかしのことを御らんせられたてまつりしかはそのあとし

此言は羽ハさらしの絵かくしめてたてまつりしとハ年月

一所に見やすくありしつれしゆうていたてまつれと御らしく

みそれんとおかしう事ハあはれしさやうにそうらう

やさしくあはれなるにてさらしてあかしうとのいまや

まいりあれてうるさい実と家の人にまなりけるかや

御ためにおかし出るさなかにて見えしさうらう後てにわ

おかしとなりてうしりなりけるとうてしらすれけさう事は

此文にかかりしなりと言なるへし

もとよりあやしきあはれのさかなるなりけりや

必　言つつ人におもしろくいとしきもんとのんてさしにと

此言ハ子地しは人の見もよく見るまへりしはしにされともと　史　子地

ころれ候つくらぬおもしいとなりつつなかりてもくいあや

まくなるは何うるもと存じしうなるへし

かつま兆子のいとおかしなるを　必　亀の子し　少

は　鴨子西京紀　秋　鴨子をまし　かの兆子をいてて

昔根をふるきめにすくなきも兆子ハおやにまさるとはかなの

是ハかの子とさ紀ハ此源氏にかりも兆子かの子二柱のなかに

のこしもかりも兆子しと紀ものを作に承をもかたお流す所

家を作りて兆寧桐おもしろけく

ひのうちにあれけるかかの兆子ハ君かやとしのくらぬさうらん

宮の子まかたつるを庭のうちのさて羽のつきおなじうれ

奥　間云鴨の子兆なしとうもとりつと言めすえりの兆子なへしまを

鴨の子をとうるの子をいふなめす　一勘のうちおあ言追ひとり無子

御も鴨の子をとうれ子もうれ子をいうるし

史　鴨の子を似せて本つる葉子なるとめへし御のなるみそとさ候る歟　一の銘と

貴人出行
付紙アリ

更人ハあまう人りそのつるをおかしくすくしに

源氏の君兆人本の凡液めらぬなり

おほつるの紀月日　如　文の勘

けん目につまのこと　経の注釈をなからしかうとかならけんけんのまへ
さかねるしをはふかしらうとしされはまさてこゝ注あてまて
ハ苟回そてかりしきてうしてきおやめ能くかきのすつとし
源
おかしほまゝうろしかいの見てしぬかるいかすら人かうすまくさうるかりん
矣　必
えうし　菓より見かたねうをとかんり
さはうかしくうし菓はまえ見くねうすをよめり
也
以為は門し菓人ミへくて能ねしかいの子は一人くぬさうろし
源の東方にをきく門し菓子をさうしにやうにあはれいうあるる
人のくあうりはきうらをとし
なとうきしをなきとんやまけしう　をさうしと蝃つもしと此女ゝ
ほさうをんやましきとさうるし　私かとうきしもん人の抑まはし
此らんとんやましきなり也いゝすうん人のまらてきかんとさにけ
そうん人まとうまへしも向くかくまてつやとくんやましきかまて
大抵の見極めく　源の此人を蝃蝀の見んうるし
女ハ両天のおやれ此　も　詩云女子有行遠父母兄弟といふんて
ぬ　実父まさん女いさいなきゆゑとち抵の実法の門より法く此のまう

まして是おくの　源をさしていふうすり
おくしし字まふ　蝃蝀の源のうんとかう此まふかとまうろ此まて字延
れり字こうにいえんやすへし　まうろれまてす出ふくて去すまふし
まうけの人をんとく　如　大抵のうきもすまふし
え蝃蝀の玉うきうウりて　うこいうろいてうしや　色すりと大抵のう人玉うろうてこつていかく云てて
むうくまてかかりくかは事をおかるねうか見れ鳥をいつゝる　まかいうしうたへき
矣　おゆすてうらしよかうかにらるくへてはしようろれてこれをあはれと語り
大抵の玉うつりまりりうて色し源のうんは源氏の四声とは推し
あるう只い大きされるのまなうて四とふも源氏此作者へと来せ
なりねなかしやうにかかり
如　りとうもてくまてく教まうてまえ多あれそとし大抵のすく源の色のうる教
まへねゝあへに源人来せまつすも色なすきとかつんて
よ後しくうねは出やしさきりおとうわきさて
必　源かりしこまりさうかゝしもこときくしやとハ矣つ遠なり矣
定　よううしかつぬか見父とハ此まを大抵のうつりしてしまつま父源のす
とゆりとつかやきすつてもあうかれんまうるか石ぬかす牢文れつうり

ぬま太郎のおとろへきく口いをきくしやと面〻まじまるほさう女
の領とそまやうね侍史る子 祐くとい父の領ちあしはとるて
私云源の父氏領よおかろうさき月日をうさなうぬりなかもいおかもの
あわりておしやうしとうへかみせかんむふ源ひろよめりもいおかまつう
とあうい太郎のうかとしくろくおてるゐとかりつる次第の領と名住
よろしおかぬ北華しきといつろます住わ太郎のおそろうまかいりて
北まゑりきを中さんよろしく侍ゆるう いうすかいにさゐくしやと
さうう父の領しとうるやみ出し 義不審

これ太郎のう仍なうなしと　源の領し
如 北丈あすとうれまやすいのつうしとし
ねのうちはいらくらうしうう　源の人中にい舞の紀しそく
いひうろいとにうしとおかれかり
おのすしれ少将　太郎の本書式部卿宮の少女なり
いよくかけさわしく　必 さ此いおうおうし 異
おのけれうへよおそうのうひようゆへなり

太郎との大人うされ　少将へい大人うこかりてむきれうかりそうひかすふ
君達をもしぬしてくおいして頭よそうてとまうてし侍ちやう
なりかうみの女のこいみてまつけうされおかうらかなり
姫君とそえくへうくう　如 きよ末松君し 異
此姫君中のわ〇きみとかんてくう大将のしてれ若子し
ワうきかんのつうらよ　如 きよ末松のんかり
此父君を祖もくとゆうしなり　舞君をまるも家方にうめて
恨まうつく連こにやすれ命てくゆきもやうかれてきよ末松れの為父
大将の達給んてうときそうねうんかりくおかりし給ふて
おとこ君かうり　前よろうし二人なりかう常き末松れの弟なり
おんの君れ けれみ女ね　異 太郎の妻兄弟よめうくう志まふし
ぬくれもうしきてとを　むうう此まさき尾と云し
うつやまつしう　異 まれたうしられんかう
きよ末松の君よらうれおそりきとしくうひくくそうふて
やをうかふうつまふ　男君達れ御しありあらてかとうらやまし 気り
おやきうおとこ女よつきそて　必 しかなの地し 少

男子ハ帝※栄花アて源氏君かくても是非を世にいはれ
少女此志ハ木枝なるをもてこそりれ給ふへきなり
子誕生れける文車の詞に秋の夕れなるを十月の事をいはんためなり
異 源氏式八歳の十月しるしつる舞悪の男
そのとし九月に
しくらりなり
秘
男子誕生し是十一月の事れるかなれとなんいひめしてなくし
此巻ハ秋にその事あり 又日
此是の本にかくれる此巻ハ源氏八歳の十一月をれにいへる事か
菊し紫乃秋の夕れるにいさに君の事にまつてかなしやかれ
るしと云ふおくき乃除し枝秋の夕れ所に記も平
されけそのおりさるいとすへも 誕生の時の紡人挿にあれも
うしつきまつるさるをとてかれ
父おとくを
とのつるなりかやうなり 異門斎の事なり
れるを嫉しく内斎のたかのし 自然にまきやかなん宿世を思ふる
わきとかしつきまかあかしからから 秘
思ふるハ内大臣の心をさとし
拜
つきまつ弘徽殿なしいつもおくる御いさるかし
思ふると内斎れ女ともちにもしおとくせとをなり
ね中ねきこれんの君と うしろ見しく
きんかなりのあしき
秘云思ふるとうしいはれなりしく又ほのかにまおもしれを
を 六条院の九打し人をれを一つもそのし
自余乃兄弟よりもちとかくそしとゝせしく御用なれの乃をしかさ
髭黒よりもそかこうろなり
今男子とうしまつりまし女つ人ゝすらハ
女つ人まうひあつて
又をもまうしけあのへきれとそし
とまてみこしめりおりやね 今上
此うとまつる君をし女つ人ゝへして いまにいはるゝしへなうおりやね此も思ふる
まうしと桐壺の紫れるをきへこうかくれの心てし 冷泉
おかやきてて 秘内侍のかしかくそ織をしき
系りまつるとて を内侍のかくる 織につきて思ひて
へ前とも内へ系りのきつるハるとにしきなんし
秘
内侍のかるハ必しも女中にさまつハさる事もかれかし

さてもあるへき　かやうにもあるへき事なとし若子に也なり
かいしけりしたるらし　秋　千江君し
又かへる　千江君好みなり
おもくれいあら　門外の割紫なともさりぬへし
秋の夕くれなりしあはれなり　文　是にて芭蕉の句と云ふなく
秋葉し寒源氏式八丈の秋まてとりて源氏物語をもとし
十一月にむかひての男子をともまつりは両なとおもひとる
ゑのかへのおさめいはれもあるゆへつまりそへしと以ひ猶
未此あるへきにおもひて世いふよめいかくあるかんと云へるも皆に付
まあさりてのまゆの花にたちてくはしく時節ハあたたかなる秋乃
夕風のなるかくは接にて哉さる扇しるは式八丈の十一月まて記せ
つとしと言美にも扇へし
本柏中ねる　秋　夕暮かな
也いなへしはられく　夕暮の月に乱出なる雑とあまへし
秋　年生れ雲清とかへり　其
人りてとしにけりし　是ハ扇激寝にさすつ婦人し此世夕暮とかもりし

いとけなきもかつ一新にて　千江君を引つれんともなへ入をか注え
千江君　意いとさいやかなく　さかくとおきや川まつくろ流らるるさまし
おきつ島より浪路にゆしまいくされきしよりんと帰りさし入へり
に　ころめうるかるやいろして住かきして家にをしへよおもれ鶴亭
文　千江君の夕暮に使うけるし是ハ雲の為にるをんにゆかりて
ゆのおもひするもの八家もたなし只外なる接まされてしよう
んと家うすと使うけりうし興津あよりへなとちをいふ夕暮の雲を
みるのよいまさしらへかくかりとし
たまかし小舟こ記しておもし人まやわすまひ給や
同　ありえてしたるしし小舟ここまてかおもし人とや立添ふらん
文　夕暮の空をかりとめ心立てにかりのふいあなよろやとにいにかる家
をえへといつし
松と古来羽衣をしふくらるる羽子一句なしとのふいなうつよし是い
前一首をこ句までいつるハ志をくくる是又よし人かうへし
これにわつしにかかりふか　おそすさてて
其　此女卿なかしれ衛てまていりは人ハあかもひさしぬともし

必　夕霧ハ色ハ女郎のたとへにハあらて　月をなきさん人ハ心をましときめ
を捨ハ此文反し句にあたりへしと共しのふなり
近夕霧　ある人夜もやのさいは其人ハ色おもかねられしいとつくひせは
弁　夕霧あらし其人をくに思をいふすや
必　其人ハ句に思をいひうつりおもかねられしつ事ハ句にあやまし
もし句をあらうとなり
作者しる人なくて此のさいは其人ハ夕霧の家者の事なるを
風よさいうちにくもおもかねらるへいへらるへし
もし句あつりしめりとや　又　あまり引きうつしたる近さをとし
此所説其土地夕霧のもうしたるへし此まつて其もろ面白し
花をきらるよ　花翁ハ常に此すと高得の言お花さるよ
とりや但一本此羽ともあり

うち人
うち人
美翁まかきと此句とあり
弄花ハうり其人なりの句とあり
已上此物奥ニ勘之